

ヒガンバナ科 ネギ属

ノビル(野蒜)

Allium macrostemon Bunge

自生環境

野原、道ばた、公園 など

原産地

日本在来

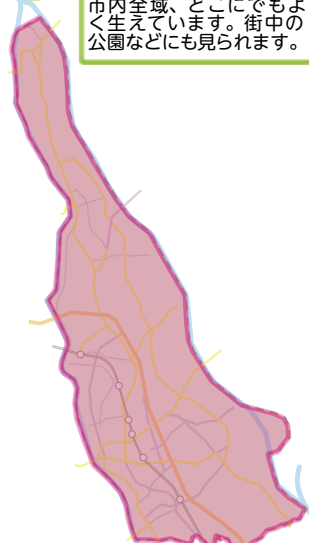
生育を脅かす要因

今のところ特になし

市内全域にでよく見られ、今のところ絶滅の心配はありません。しかし、目の敵にしすぎるのは考えもの。地域に咲く野の花として、やさしく見守る気持ちを大切にしたいところです。

市内の分布状況

市内全域、どこにでもよく生えています。街中の公園などにも見られます。



特徴

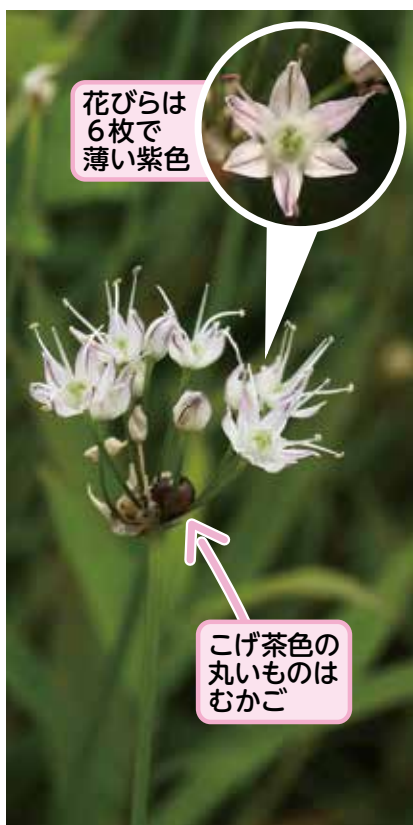
☆ 野原や道ばた、公園の木陰など、身近な場所によく生える多年草です。地中に白くて丸いラッキョウのようなもの（鱗茎）があり、この部分が食用になります。ネギの仲間、全草に特有のネギの匂いがあります。

☆ 初夏に花茎を長く伸ばし、その先につぼみがつきます。つぼみは初め、総苞（そうほう）と呼ばれるものに包まれています。この総苞はやがて破れて、薄紫色の花を咲かせます。ただ、開花率は低く、つぼみの代わりにむかごがつくこともしばしばです。

☆ 花が咲いてもほとんど結実しません。地中で新しい鱗茎が次々とつくられ、それで増えていきます。また、初夏に花茎の先についたむかごも、ポロっと落ちて発芽し、新しい株になります。

誤食事故の多い山菜

身近な場所にたくさん生えていて、ピリッとした辛みとネギ属特有の風味が魅力のノビル。春になると、ノビル掘りをしている人の姿もよく見かけます。ところが、スイセンやヒガンバナ、タマスダレなど、強い毒を持つ球根植物が野生化して、ノビルに混じって生えていることがあり、混入による中毒事故が後を絶ちません。採集後にしっかり確認し、自信がないものは口にしないようにしましょう。



むかご・・・芽が変化してできたもの。地面に落ちると、芽を出して新しい株として育つ。

キク科 キオン属

ノボロギク (野檻樓菊)

Senecio vulgaris L.

自生環境

畑地、野原、公園 など

原産地

ヨーロッパ

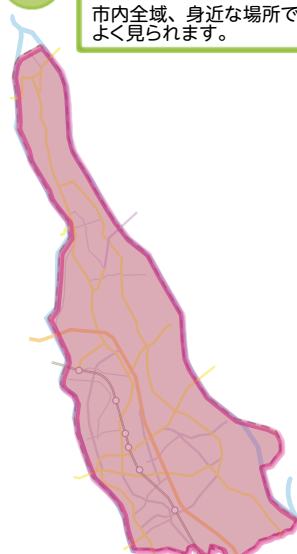
予想される被害



今や世界中に広がるほどの、強靱な繁殖力と環境適応力の持ち主です。除草剤への耐性も身につけているため、農地周辺で特に元気に、生い茂っています。

市内の分布状況

市内全域、身近な場所で見られます。



特徴

- ☆ 強靱な繁殖力と環境適応力の持ち主で、世界中に広がっている1～越年草です。国内には明治初期に渡来し、以降一気に全国へと広がって、今やいつでもどこでも見られる身近な草のひとつとなっています。
- ☆ よく育ったものでは草丈 50cm ほどになりますが、周囲の環境に応じて大きく変動します。季節に関係なく発芽して育ち、花や果実も 1 年中見られます。総苞片の先は通常黒くなりますが、気温の高い時期には黒色が目立たないこともあります。
- ☆ 情報が少ないためはつきりしませんが、全草にセネシオンという毒成分を含み、誤って食べると中毒を起こす可能性があります。口にしない限りは大丈夫ですが、どこにでも生えている草なので、作物や山菜の収穫時に混入しないよう気をつけたいところです。

ボロボロな菊でボロギク

ノボロギクは漢字で書くと「野檻樓菊」。そう、野原に生えるボロギク (檻樓菊) の意味です。ボロギクは、沢沿いに生えるサワギクの別名。サワギクは薄暗くてジメジメとした山道に咲く、なかなか可憐な花です。ところがどうも、昔の人はこの花が咲き乱れる様子を見て、まるでボロ切れが集まっているようだ、と連想したみたいです。それでボロギクなる気の毒な名前がつけられました。



1 年中
花を咲かせる



小さな花が
束になって
1つの大きな
花のように
なっている

そうほうへん
総苞片の先は
通常黒い



タネが熟すと
丸い綿帽子が開く



ボロギクの
名のもとに
なった花

山地の沢沿いに生え
野田市にはない

参考 サワギク ボロギク

花が咲き進むと
茎は立ち上がり
50cm ほどになる

キク科 コゴメギク属

ハキダメギク (掃溜菊)

Galinsoga quadriradiata Ruiz et Pav.

自生環境

道ばた、畑地 など

原産地

熱帯アメリカ

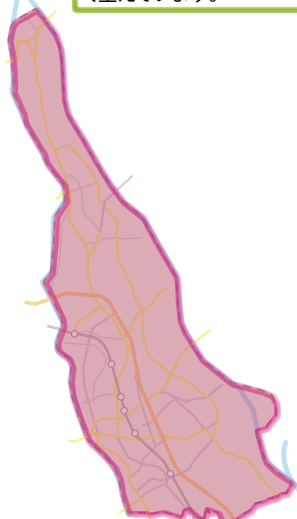
予想される被害



環境適応力、繁殖力ともに強いいため、いたるところに生えています。気温さえ確保できれば通年開花可能なため、ビニルハウス内で大繁殖して農業被害をもたらすこともあります。

市内の分布状況

市内全域、どこにでもよく生えています。



特徴

- ★ 熱帯アメリカ原産で、世界中に広がっている1年草です。日本には大正時代に渡来したと推定されますが、よく似た仲間のコゴメギクとの混同もあり、あまりはつきりしません。国内ではハキダメギクが圧倒的に多く、市内でもハキダメギクが優勢ですが、木間ヶ瀬地区などコゴメギクが目立つ場所もあります。
- ★ 世代交代のサイクルが早く、発芽から1ヶ月ほどで開花・結実できるようになります。また、一定の温度が維持されれば、季節に関係なく年中開花・結実が可能で、市街地や温室の中などでは通年発生しています。
- ★ 小さな花が多数集まって1つの大きな花のようになっています。外側に白い舌状花が通常5個ずつつきますが、数は変動します。果実は綿毛がついており、風であちこちに飛ばされていきます。

発見場所が悪かった

ハキダメギクは牧野富太郎博士の命名で、最初に発見されたのが世田谷(東京都)の掃溜めだったことにちなむとされています。掃溜めとは、いわば庭のごみ置き場で、落ち葉や剪定枝などを掃いて溜めおく場所のことを言います。ただ、文献をいろいろ調べると、当時はハキダメギクとコゴメギクの2種が正しく認識されていなかった可能性もあり、真相はよく分かりません。



道ばたや畑にたくさん生えている



舌状花と筒状花がいくつも集まって1つの花のようになっている

筒状花

舌状花



茎には毛がたくさん生えている



霜をかぶったハキダメギク
霜が降りるまで咲き続ける



タネには幅の広い綿毛がついている



葉の縁はギザギザが目立つ

ハス科 ハス属

ハス (蓮)

Nelumbo nucifera Gaertn.

自生環境

池や沼、湖など

原産地

熱帯アジア

予想される被害



勢いよく繁茂するので、天然の湖や沼などに、新たに植えるのは、あまりオススメできません。大量の堆積物で水質が悪化したり、水の流れが滞るなどの影響が懸念されます。

市内の分布状況

市内には自生しません。大賀ハスは、関宿総合公園などに植えられています。昔からある沼などには、かつての蓮田の名残と思われるものが見られることもあります。



お お が

大賀ハス

1951年、千葉の検見川で、大賀一郎博士のチームが、2000年以上前のものと推定されるハスのタネを発掘しました。そのタネから育った株は1952年7月18日に初開花。この花は直径25cm、淡紅色、花弁数23枚との記録が残っています。このハスは「検見川の大賀蓮」と呼ばれ、株分けしたものが各地に植えられ、千葉県の天然記念物として、また、千葉市の花として広く親しまれています。

特 徴

- ☆ そこそこの水深がある池や沼に生える多年草です。主な花期は6～7月で、花は直径20cm以上、午前中を中心に開きます。
- ☆ 水底の泥の中に太い地下茎を長く伸ばしながら、どんどん増えていきます。この地下茎はレンコン(蓮根)と呼ばれます。ただし、観賞用の品種はあまり美味しくないと言われます。
- ☆ 葉の表面はよく水をはじきます。この構造を応用したものがはっ水加工です。小さな葉や、生育初期の葉は水面に浮かびますが、通常は水面から大きく突き出るように葉を伸ばします。
- ☆ 果托は穴だらけで、1つの穴に1つずつ、タネが入っています。この果托がまるで蜂の巣のように見えることから、古くはハスのことを「はちす」と呼んでいました。

花は午前中を中心に咲き
1つの花の寿命は4日ほど
花には香りがある



タネは
とても硬く
寿命が長い



1つの穴に
タネは1粒



かたく
果托がまるで
ハチの巣そっくり！

葉は水を
よくはじく

葉や花は
水面から
大きく
突き出る



出だしの葉は
水面に浮かぶことも

キク科 ハハコグサ属

ハハコグサ (母子草)

Gnaphalium affine D. Don

自生環境

野原、畑地、道ばた など

原産地

日本在来

生育を脅かす要因



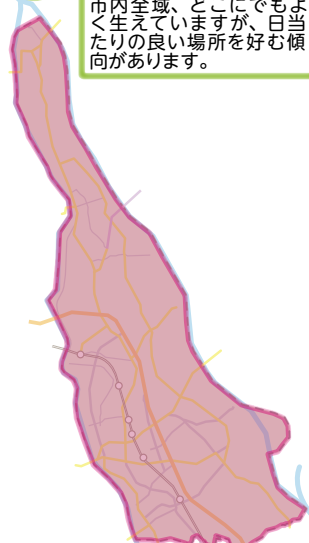
身近な場所に生えるため、除草剤散布などの人間活動の影響を強く受けます。また、最近は外来種のセイタカハハコグサが増加していて、雑種もあちこちで見られるようになりました。

特徴

- ☆ 身近な場所によく生える越年草です。古くは御形（ゴギョウ、オギョウ）とも呼ばれ、冬の間も葉があるため、春の七草のひとつとして七草がゆにも入れられます。また、かつては草餅の材料としても利用されていました。
- ☆ 茎や葉には白い綿毛がびっしりと生え、草全体が薄青緑色に見えます。主な花期は春ですが、それ以降も開花する株がちらほらと見られます。
- ☆ 最近、造成地などには、茎がよく枝分かれし、伸びてひょろひょろするタイプのものが見られます。これは外国産のハハコグサと考えられます。また、ヨーロッパ原産で茶色い花をつけるセイタカハハコグサも増加傾向にあり、最近は両者の雑種アイセイタカハハコグサも見られるようになりました。

市内の分布状況

市内全域、どこにでもよく生えていますが、日当たりの良い場所を好む傾向があります。



名前の母子とは？

現行の日本名「ハハコグサ」には、母子草という漢字が当てられています。これには諸説ありますが、最も有力なものは、「ほおこぐさ」が伝聞を繰り返すうちに、次第に変化して「ははこぐさ」になったというものです。花後のハハコグサは綿毛つきの果実が目立ち、ばさばさに乱れて見えます。この状態を「ほおける」と言い、「ほおこぐさ」はそこから来ていると考えられます。



キク科 ムカシヨモギ属

ハルジオン(春紫苑)

Erigeron philadelphicus L.

自生環境

道ばた、野原、畑地 など

原産地

北アメリカ

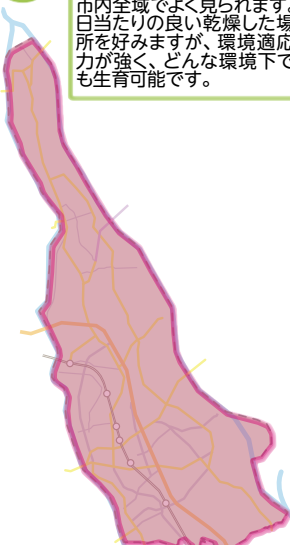
予想される被害



環境適応力と繁殖力が強く、自然豊かな場所に侵入して、希少種の生育に影響を与える可能性があります。また、農薬耐性があるため、農地で大繁殖することもあります。

市内の分布状況

市内全域でよく見られます。日当たりの良い乾燥した場所を好みますが、環境適応力が強く、どんな環境下でも生育可能です。



特徴

- ★ 大正時代、「ピンク・フリーベイン」の名で、園芸植物として日本に渡来しました。しかし、繁殖力が強くて野生化し、今ではどこにも見られるタフな野草としての地位を確立しています。
- ★ 多年草で、ロゼット（葉を地面にべったりと張りつけた状態）で越冬します。主な花期は春ですが、それ以外の季節でも、ちらほらと花を咲かせることがあります。草丈や花色などには個体差があり、それぞれに細かく品種名がつけられていたこともありました。
- ★ 同じような場所に生えるヒメジョオンとよく似ていますが、ハルジオンは（１）花期は春が中心、（２）葉はギザギザしない、（３）茎の断面を取ると中が空洞、（４）花期にも株元の葉が残るなどの特徴から見分けることができます。

人との闘いで強靱に

ハルジオンは、その可愛い姿から、もともと園芸植物として渡来しました。しかし野生化し、いつしかビンボウグサなどと呼ばれ、誰も栽培しなくなり、嫌われる存在になりました。やがて人々は除草剤を使い、ハルジオンに徹底攻撃を仕掛けるようになりました。追い詰められたハルジオンは除草剤への耐性を身につけ、愛らしい草だったのに、しごとくタフな草へと変貌を遂げました。



ヒガンバナ科 ヒガンバナ属

ヒガンバナ (彼岸花)

Lycoris radiata (L'Hér.) Herb.

自生環境

社寺林、土手、あぜ など

原産地

中国

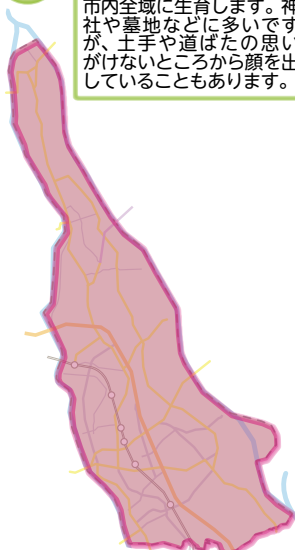
予想される被害



日本には古い時代によつてきて、農地周辺に多く見られます。今のところ、特に生態系に悪影響を及ぼすような雰囲気は見受けられませんが、有毒なので誤食に注意が必要です。

市内の分布状況

市内全域に生育します。神社や墓地などに多いですが、土手や道ばたの思いがけないところから顔を出していることもあります。



特徴

- ☆ 日本に生育しているものは、かなり古い時代に中国大陸から渡来したものと考えられています。かつては死人花、幽霊花などとも呼ばれ忌み嫌われてきた存在ですが、近年は花の美しさが見直され、観賞用に栽培されることも多くなりました。
- ☆ 国内の野生株は、花が咲いてもタネができない系統の種類で、球根が増えていきます。中国には、開花がやや早くてタネができる系統の株（コヒガンバナ）もあり、まれに植栽されています。
- ☆ ヒガンバナの名のとおり、秋の彼岸の頃に突然茎をにゅっと伸ばして花を咲かせます。花の後に葉が出てきて、葉がわさわと茂った状態で冬を越します。葉は初夏に枯れて地中で休眠し、夏は地上部は何もない状態となります。

赤色 × 黄色 = 白色

最近では、白っぽい花のヒガンバナもよく見るようになりました。これにはシロバナヒガンバナの名前がありますが、ヒガンバナの白花品ではありません。赤い花のヒガンバナと、同じ仲間である黄色い花を咲かせるショウキズイセンを交雑した結果、誕生したものです。ちなみに、ヒガンバナの白花品はギントウカと言いますが、ギントウカと断定された株はいまだに見つかっていないようです。



茎の先に赤い花が放射状に咲く



冬の間は葉を出している



仲間
ショウキ
ズイセン



花が終わる頃
葉が出てくる



夏は地上部が
枯れてしまう



交雑種
シロバナ
ヒガンバナ

ヒユ科 イノコヅチ属

ヒナタイノコヅチ (日向猪子槌)

Achyranthes bidentata Blume var. *fauriei* (H.Lév. et Vaniot)

自生環境

道ばた、野原 など

原産地

日本在来

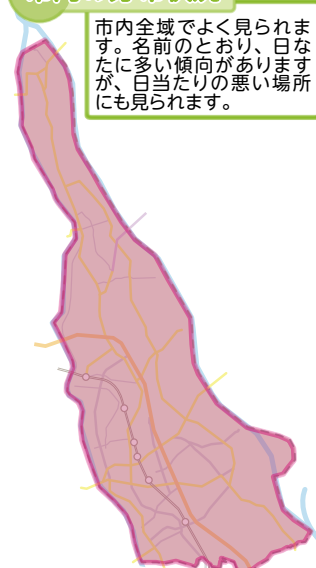
生育を脅かす要因

今のところ特になし

身近な場所によく見られ、今のところ絶滅の心配はありません。しかし、目の敵にしすぎるのは考えもの。地域に咲く野の花として、やさしく見守る気持ちを大切にしたいところです。

市内の分布状況

市内全域でよく見られます。名前のとおり、日なたに多い傾向がありますが、日当たりの悪い場所にも見られます。



特徴

- ☆ 道ばたや野原など、いたるところに生育している、頑丈で根の張りの良い多年草です。特に、日当たりの良い場所を好む傾向があります。
- ☆ 夏～秋にかけて、茎の先に緑色の花の穂をつけます。花の穂がつく部分の茎は、白い毛が多く生える傾向があります。花後にできる果実には 2 本の刺があり、これがクリップのように服の繊維に引っかかってくっつきます。
- ☆ 冬になると地上部は枯れ、根で越冬します。初冬のうちは、枯れた茎の中にある水分が凍結して、白く平べったい氷が皮を突き破って、にゅるっと伸びてくることがあります。また、枯れる前に葉が赤く色づくこともあります。

イノシシのかかと

イノコヅチは猪子の槌、つまりイノシシのかかとという意味です。よく育ったイノコヅチは、茎の節がぼこぼこ膨らむため、それをイノシシのかかたと見立てたのです。この部分にはイノコヅチウロコタマバエが卵を産んで虫こぶをつくることがあり、そうなるで一層大きく膨らみます。ちなみに、中国では牛膝（ゴシツ）と言いますが、こちらも茎の節の膨らみを牛の膝に見立てたのが由来です。



シソ科 オドリコソウ属

ヒメオドリコソウ(姫踊り子草)

Lamium purpureum L.

自生環境

道ばた、野原、畑地 など

原産地

ヨーロッパ

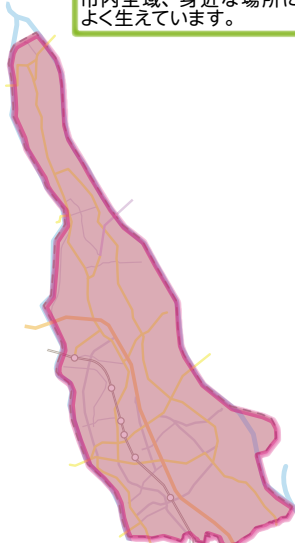
予想される被害



日本に定着してかなりの年月が経ち、生態系の中にうまく溶けこんだようです。ただ、繁殖力が強く、他の在来種の生育場所を奪う可能性があり、引き続き動向には留意が必要です。

市内の分布状況

市内全域、身近な場所によく生えています。



特徴

- ☆ 世界中に広がる越年草で、日本には明治時代に渡来しました。現在はホトケノザやオオイヌノフグリなどとともに、春の野に咲く花としておなじみの存在となっています。日当たりが良く暖かい場所では、冬の間もよく花が咲いています。
- ☆ 開花が近づくと茎が立ち上がり、そこに葉が密について、まるでクリスマスツリーのような姿になります。茎の上の方につく葉は赤紫色に色づきます。この葉のすき間からピンク色の細長い花が次々と顔を出します。ごくまれに白い花を咲かせる株があり、それはシロバナヒメオドリコソウと呼ばれます。
- ☆ 花後、がくに包まれるようにして4個のタネができます。タネには白いエライオソームがついており、エライオソーム目当てでやってきたアリにタネを託し、遠くに運んでもらっています。

葉色の变化に注目しよう

ヒメオドリコソウの葉は、普通少し青みがかった明るい緑色です。しかし、冬の間は、厳しい寒さに当たって紅葉していることも珍しくありません。また、花期が近づいて茎が立ち上がってくると、上の方に赤紫色の葉がつけます。ただ、白花種のシロバナヒメオドリコソウは、茎上部の葉が緑色のままです。春の終わり、枯れる直前には、葉色があけぼの色やあんず色に染まります。



ヒメジョオン (姫女苑)

Erigeron annuus (L.) Pers.

自生環境

道ばた、荒地、河川敷 など

原産地

北アメリカ

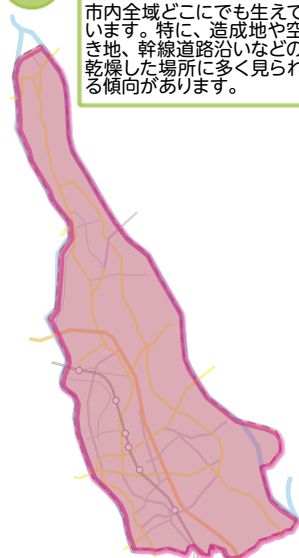
予想される被害



大型の草で、とても繁殖力が強い
ため、他の植物の生育を妨げてしま
います。また、自然豊かな場所にも侵
入するため、希少な生態系を保全す
る上での脅威になります。

市内の分布状況

市内全域どこにでも生えて
います。特に、造成地や空
き地、幹線道路沿いなどの
乾燥した場所に多く見られ
る傾向があります。



特 徴

- ☆ 日当たりが良く乾燥した場所に、特に多く見られます。秋に
発芽した後、苗の状態で越冬し、翌年開花します。開花・結
実後に枯れますが、1つの株から膨大な数のタネができるた
め、その繁殖力はすさまじいものがあります。
- ☆ 古い時代には、柳葉姫菊 (ヤナギバヒメギク) の名前で観賞用
に栽培されていたこともありました。
- ☆ 花はたくさんの小さな花が集まって、大きな1つの花のよう
になっています。中心付近の黄色い部分はたくさんの筒状花
が集まってできたものです。一方、花びらのような細い糸の
ような部分は、1本1本が舌状花という1つの花になってい
ます。

ヒメジョオンの個性

ヒメジョオンをていねいに観察すると、葉の様
子や茎の高さ、花の色など細かい違いがいろ
いろと見られることに気がつきます。ヒメジョオ
ンの葉は通常明るい黄緑色で、縁はギザギザと
していますが、中にはあまりギザギザしないもの
や、葉色が濃いものもあります。また、草刈り
などの要因で草丈が大きく変動するほか、花色
も白色のほか、薄紫色のものも見られます。

黄色い部分は
とうじょうか
筒状花の集まり



白い花びらの
ようなものは
ぜつじょうか
舌状花
1枚1枚が
1つの花

花つきが良いため
咲き進むと
とてもきれい



上部の葉は
細長い形

葉は黄緑色で
ギザギザ



冬は地面に
張りついて
寒さをしのぐ
(ロゼット)



ヒルガオ科 ヒルガオ属

ヒルガオ (昼顔)

Calystegia japonica Choisy

自生環境

道ばた、畑地、野原 など

原産地

日本在来

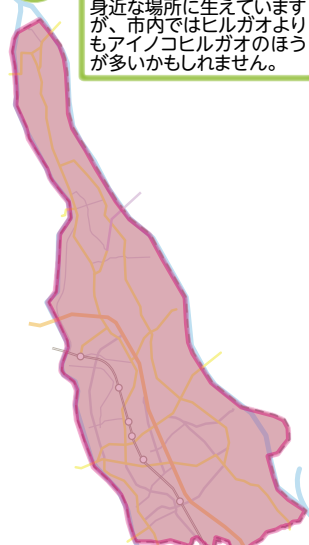
生育を脅かす要因

〔今のところ特になし〕

市内全域でよく見られ、今のところ絶滅の心配はありません。しかし、目の敵にしすぎるのは考えもの。地域に咲く野の花として、やさしく見守る気持ちを大切にしたいところです。

市内の分布状況

身近な場所に生えています
が、市内ではヒルガオよりも
アイノコヒルガオのほうが
多いかもしれません。



特徴

☆ 朝しか咲かない「朝顔」に対して、昼間もずっと咲いているので「昼顔」と呼ばれます。日当たりの良い場所によく生える多年草で、地下茎を伸ばしながらどんどん広がっていきます。また、地上の茎はつるになってあちこちに絡みつきます。

☆ 葉には耳のようなものがあります。同じ仲間のコヒルガオはこの耳が真横に張りだし、さらに2つに切れ込みますが、ヒルガオは後ろに張りだし切れ込みません。ただ、市内では葉の形が中途半端なアイノコヒルガオがかなり多く見られます。

☆ 6～10月頃、葉のわきから直径5 cmほどのピンクの花を咲かせます。花色の濃淡は株によって違いますが、コヒルガオに比べると色が濃い傾向にあります。またコヒルガオと異なり、花柄はつるつるでフリルのような翼はありません。テンシボタン(ヤエヒルガオ)という八重咲き品種があり、まれに栽培されています。

アイノコヒルガオとは？

ヒルガオとコヒルガオは、花柄にフリルのような柄があるか、葉の耳の張りだし向き・切れ込み具合の2点が大きな識別点となります。ところが、実際に観察していると、どちらともつかず判断に悩むような株に出会うことが珍しくありません。これがアイノコヒルガオで、ヒルガオとコヒルガオの雑種と考えられています。市内のものは純粋なコヒルガオやヒルガオは少なく、多くはアイノコヒルガオです。



つるになって
あちこちに
巻きつく

コヒルガオよりも
花は大きく
色も濃いめ

果実は
めったに
見られない



がくの下に
2枚の苞
がある

がく

苞

花柄に
フリルの
ような
翼はない



耳は後ろに
張りだし
通常2つに
切れ込まない

耳

アイノコヒルガオ

ヒルガオとコヒルガオの雑種



耳は斜め後ろ
に張りだす

耳が
2つに
切れ
込む

花柄にフリルの
ような翼がある

マメ科 フジ属

フジ (藤)

Wisteria floribunda (Willd.) DC.

自生環境

林縁、河川敷 など

原産地

日本在来

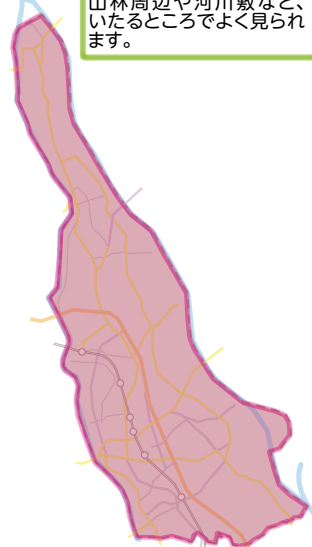
生育を脅かす要因

(今のところ特になし)

市内全域でよく見られ、今のところ絶滅の心配はありません。しかし、目の敵にしすぎるのは考えもの。地域に育つ植物として、やさしく見守る気持ちを大切にしたいところです。

市内の分布状況

山林周辺や河川敷など、いたるところでよく見られます。



特徴

- ☆初夏の花木として藤棚などに栽培されるほか、山野に普通に生えるつる性の落葉樹です。つるはとてもしなやかで、折れにくくて丈夫なため、かごを編むのに使われます。ノダフジ(野田藤)とも言いますが野田市とは関係なく、大阪のフジの名所の地名から来ています。
- ☆4～5月頃に、藤色とも称される薄い紫色の花の穂を多数ぶら下げます。花色違いとして白色や桃色などがあり、いずれも観賞用に栽培されています。
- ☆花後、長さ 10～20cm ほどの硬い豆のさやがいくつもぶら下がります。表面は微細な毛が多く、ピロードのような肌触りです。熟すとさやがねじれるようにして弾け、中のタネを飛ばします。

クマバチはフジが好き

初夏を彩るフジの花。その美しさは、平安時代から人々を魅了してきたと言われています。この花にはクマバチがよくやってきます。羽音に迫力があるためどうしても怖い印象がありますが、とても温厚な性格で、藤棚では花の蜜を吸っているだけ。こちらから攻撃しない限り刺しません。フジにとっては受粉を手助けをしてくれる大切な存在でもあるので、そっと見守ってあげてくださいね。



薄い紫色の花の穂が何本もぶら下がる



旗弁には黄色い斑がある

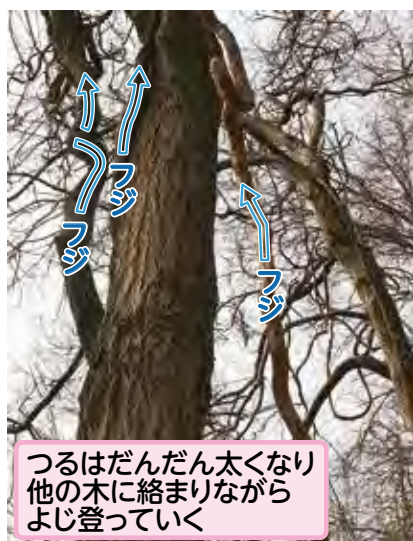


果実の表面は毛が多く触るとふかふか



11～19枚の小葉が鳥の羽根のようにつく

しょうよう小葉



つるはだんだん太くなり他の木に絡まりながらよじ登っていく



フジの花の蜜を吸うクマバチ

アカネ科 ヘクソカズラ属

ヘクソカズラ (屁糞蔓)

Paederia foetida L.

自生環境

道ばた、河川敷、林縁 など

原産地

日本在来

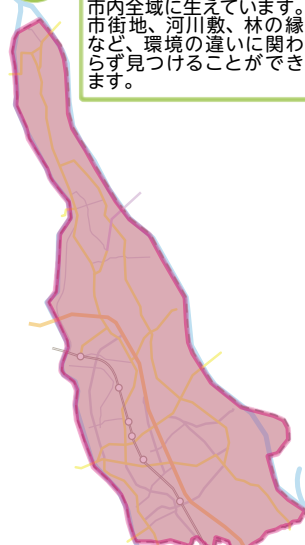
生育を脅かす要因

{今のところ特になし}

身近な場所によく見られ、今のところ絶滅の心配はありません。しかし、目の敵にしすぎるのは考えもの。地域に咲く野の花として、やさしく見守る気持ちを大切にしたいところです。

市内の分布状況

市内全域に生えています。市街地、河川敷、林の縁など、環境の違いに関わらず見つけることができます。



特徴

- ☆ 道ばたや河川敷、草やぶ、林縁など、いたるところによく生えるつる植物です。多年草ですが、何年も経つと茎の下の方が木質化して、藤づるのようになります。
- ☆ 葉を揉むと、顔をしかめたくくなるような悪臭があることから、屁、糞の字を当てた名前がつけられました。一方で、花が可愛いことからサオトメカズラ（早乙女蔓）、花の真ん中がお灸をすえた後のように丸く赤くなることからヤイトバナ（灸花）の別名もあります。
- ☆ 果実は丸く、熟すとカサカサになります。色は黄土色で光沢があり、長持ちするため、クリスマスリースなどの飾りにも最適です。ただし、食用にはなりません。

花や葉は個性豊か

ヘクソカズラは株ごとに葉や花の大きさ、形、色などが異なり、とても個性豊かな植物と言えます。葉の大きさが 10cm を超えるオオサオトメカズラ、茎や葉に毛が多いビロードヤイトバナ、葉が細長いホソバヘクソカズラ、海岸に多く葉が分厚く無毛で光沢のあるハマサオトメカズラ、花の筒の部分が極端に長いツツナガヤイトバナなど、品種や変種として名前がつけられているものもあります。



花の真ん中は赤くなっている



茎はつるになってあちこちに絡みつく



葉を揉むととても臭い



果実はカサカサで指でつまむとバリバリに割れてしまう

バラ科 キジムシロ属

ヘビイチゴ (蛇莓)

Potentilla hebiichigo Yonek. et H. Ohashi

自生環境

湿地、あぜ、河川敷 など

原産地

日本在来

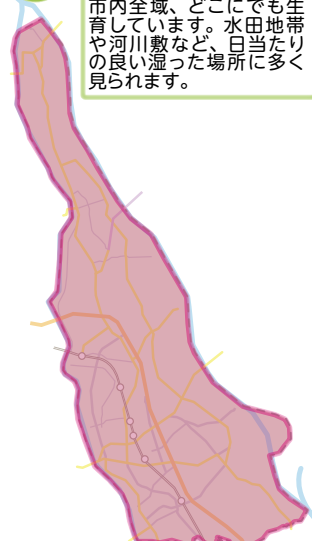
生育を脅かす要因

(今のところ特になし)

市内全域でよく見られ、今のところ絶滅の心配はありません。しかし、目の敵にしすぎるのは考えもの。地域に咲く野の花として、やさしく見守る気持ちを大切にしたいところです。

市内の分布状況

市内全域、どこにでも生育しています。水田地帯や河川敷など、日当たりの良い湿った場所に多く見られます。



特徴

- ☆ 湿った場所によく生える多年草です。地面をはうようにして広がり、茎の節々から根を出して増えていきます。葉は3枚1組で、縁はやや不規則に切れ込みます。葉色は黄緑色で、寒さに当たると赤く色づきます。
- ☆ 春に直径 1.5cm ほどの黄色い花を次々咲かせます。花びらは通常5枚ですが、枚数は多少変動することがあります。秋から初冬の頃にもちらほらと開花することがあります。がくは5枚ですが、その外側に副がく片と呼ばれる小さな葉のようなものが5枚、えりまき状につきます。
- ☆ 花後、鮮やかな赤色のいちごができます。果実（いちごのツブツブの1つ1つ）の表面は、ルーペで拡大して見ると、しわしわになっています。

毒はないけど…

ヘビイチゴは毒があるから食べられない…と思われるがちですが、実は無毒で食べようと思えば食べられます。その代わり、見た目の鮮やかさとは裏腹にほとんど無味で、草特有の青臭さがわずかに感じられる程度です。さらに、スポンジのようにスカスカで食感もイマイチです。名前も、人ではなく蛇が食べるものだという発想から来ていますが、やはり味の悪さが関係しているのかもしれません。



シソ科 オドリコソウ属

ホトケノザ (仏の座)

Lamium amplexicaule L.

自生環境

道ばた、野原、畑地 など

原産地

日本在来

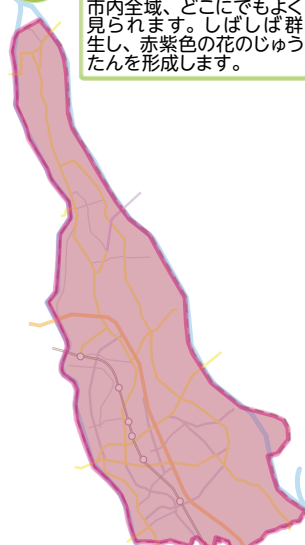
生育を脅かす要因

{今のところ特になし}

市内全域でよく見られ、今のところ絶滅の心配はありません。しかし、目の敵にしすぎるのは考えもの。地域に咲く野の花として、やさしく見守る気持ちを大切にしたいところです。

市内の分布状況

市内全域、どこにでもよく見られます。しばしば群生し、赤紫色の花のじゅうたんを形成します。



特徴

- ☆ いたるところによく生える 1～越年草です。秋に発芽し、成長しながら冬を越し、翌春開花するのが典型的ですが、環境が合えば季節に関係なく生育し、開花・結実します。
- ☆ 花は唇形花と呼ばれる形態で、正面から見ると、上唇、下唇に相当する部分があります。下唇の部分には濃い赤紫色の斑紋があり、これで昆虫に美味しい蜜があるよとアピールしています。ただ、環境によっては、花を開かず、つぼんだ状態のまま中で自家受粉で完結させることもあります。
- ☆ タネはエライオソームと呼ばれるアリの好物がついています。アリは、この部分を食べるためにタネごと運びますが、タネ本体は食わずにそのまま捨ててしまいます。このようにしてタネをアリに運んでもらい、自分の分布を広げる作戦を取っています。

個性豊かな花の表情

ホトケノザは、赤紫色で、下唇に濃い色の斑点がある花を咲かせるのが典型的な個体です。しかし、よく観察すると、花色の濃淡や斑紋の有無など、花の表情はとても多彩であることに気づかされます。比較的多いのは、全体的に色が濃く、斑紋のない花を咲かせるものです。ごくまれに、純白花で斑紋がないタイプのものがあり、こちらはシロバナホトケノザという名前がつけられています。



ブナ科 マテバシイ属

マテバシイ (馬刀葉椎)

Lithocarpus edulis (Makino) Nakai

自生環境

植栽 (公園 など)

原産地

日本在来

生育を脅かす要因

(今のところ特になし)

在来種であるものの、市内は分布域外です。ただ、公園によく植えられるため、見かける頻度は高めです。大量のどんぐりを落としますが、今のところ野生化はしていないようです。

市内の分布状況

在来種ですが、市内は分布域外なので自生はありません。公園にはよく植えられています。

特徴

- ☆ 本来の分布は、九州から沖縄にかけての海沿いの山林です。そのため、日本在来でありながら市内は分布範囲外で、野生のものはありません。一方で成長が早くて剪定に強く、大気汚染や直射日光、潮風にもよく耐えるため、公園樹や街路樹などとしてとてもよく植えられています。そのため、最もなじみの深いどんぐりのひとつになっています。
- ☆ 雌雄同株ですが、雄花の穂と雌花の穂が別々につきます。どちらも花期は6月で、雄花の開花時は栗の花に似た匂いが辺りに漂い、たくさんの虫が蜜や花粉を求めてやってきます。
- ☆ どんぐりは「2年型」で、雌花の穂は開花したその年はどんぐりにはなりません。小さなまま冬を越し、翌年の夏以降、急速に膨らんでどんぐりの形になります。どんぐりはあくが少なく、中身はゆでて食べることができます。

ムラサキツバメとの関係

ムラサキツバメ(シジミチョウ科のチョウ)は近畿地方以西に生息し、幼虫はマテバシイの葉を食べて育ちます。このムラサキツバメが近年じわじわと分布を広げてきており、2010年以降は野田市内でもたびたび見られるようになりました。現在は、東北部にまで広がっているようです。おそらく、公園樹として、マテバシイがたくさん植えられるようになったことが関連しているものと思われる。



ツユクサ科 ツユクサ属

マルバツユクサ (丸葉露草)

Commelina benghalensis L.

自生環境

道ばた、野原 など

原産地

日本在来

生育を脅かす要因

(今のところ特になし)

関東地方より西の地域に自生する在来種ですが、もともと野田市にはありませんでした。原因は不明ですが、近年少しずつ数が増えてきているようです。

特徴

- ☆ アジア～アフリカ、オーストラリアの熱帯地方に広く分布し、国内では関東地方以西の比較的暖かい海沿いの地域に自生しています。気候の温暖化が影響しているのかどうか分かりませんが、ここにきて北へと分布を拡大する傾向にあるようです。
- ☆ ツユクサによく似ていますが、丸葉という名のとおり、葉の幅が広く丸い形をしています。花はツユクサよりも小さく、花弁はずんぐりして、色はやさしい藍色です。
- ☆ 茎は地面をほうのように伸び、節々から根を出していきます。そのため、むしっても茎の断片が残ってすぐに復活します。さらに、地中でも開花・結実をする性質があります。

市内の分布状況

現時点ではまだ見られる地域は限られていますが、今後どんどん増えていく可能性があります。

桐ヶ作～
新田戸周辺

木間ヶ瀬～
古布内周辺

今上周辺

地中でひっそりと…

マルバツユクサは、地上でもたくさん花を咲かせ、タネをつくっていきますが、一方で、地中でも開花・結実しています。地中の花や果実は白っぽく、地上のそれとはずいぶん違った姿をしています。しっかりと発芽する能力を持っています。これは地上の茎が刈られてしまったり、動物などに食べられたりしても、根こそぎ抜かれられない限り子孫を残すことができるという、生き残り作戦のひとつです。



葉は丸くて
縁が波打つ



ツユクサに比べると
花弁は小さく丸みを帯びる



ほう
苞は毛が多い



根を引っっこ抜くと
土の中にできた果実が
ぞろぞろくっついてくる

シソ科 アキギリ属

ミゾコウジュ (溝香藿)

Salvia plebeia R.Br.

の
位置
つけ

千葉
県



自生環境

河川敷、湿地、水辺 など

原産地

日本在来

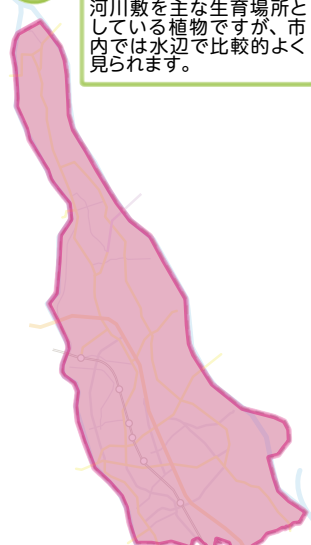
生育を脅かす要因



護岸整備、埋め立て、除草剤使用などの影響を受けやすい植物です。また、湿地の乾燥化が進んで、セイタカアワダチソウなどの草やぶになると姿を消してしまいます。

市内の分布状況

河川敷を主な生育場所としている植物ですが、市内では水辺で比較的良好に見られます。



特徴

- ☆ 湿った草地や水辺に生える越年草です。市内では、利根川・江戸川・利根運河の河川敷で特に多く見られます。増水や工事などで表面の土がかき混ぜられる「かく乱」が発芽に重要な役割を果たしており、かく乱後はしばしば大群生となります。
- ☆ 葉は長楕円形で、葉脈が「溝」のように大きくくぼんで、ぼこぼこして見えるのが特徴です。葉を揉むと香りがしますが、どちらかといえば悪臭系です。
- ☆ ロゼットで越冬した後に茎が立って、草丈 30～70cm ほどになります。初夏に、薄青紫色の花の穂がつき、花期はがくも紫色に色づきます。がくは花後もそのまま残り、その中に 4 個のタネが入ります。品種に白い花を咲かせるシロバナミゾコウジュがあると言われてはいますが、現時点で市内では見つかっていません。

日本の野生サルビア

サルビアと言うと、夏～秋に花だんを鮮烈な赤で彩るヒゴロモソウを連想する人が多いかもしれませんが。サルビアは、シソ科アキギリ属の植物の総称で、ラテン語の *Salvia* をカタカナ読みしたものです。この仲間は世界中に 500 種以上もある大きなグループで、葉の芳香からハーブとして利用される種も少なくありません。日本には9種が自生していて、ミゾコウジュはその中のひとつです。



タデ科 イヌタデ属

ミゾソバ (溝蕎麦)

Persicaria thunbergii (Siebold et Zucc.) H. Gross

自生環境

水辺、湿地 など

原産地

日本在来

生育を脅かす要因

{今のところ特になし}

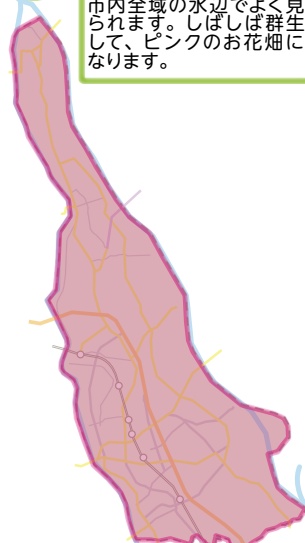
身近な場所によく見られ、今のところ絶滅の心配はありません。しかし、目の敵にしすぎるのは考えもの。地域に咲く野の花として、やさしく見守る気持ちを大切にしたいところです。

特徴

- ☆ 水路や湿地、河川敷などの水辺環境に生え、しばしば群生します。秋になるといっせいに開花し、水辺はピンクのお花畑になります。1つ1つの花も可愛い形をしています。
- ☆ 花びらは根元は白色ですが、先のほうがほんのりピンク色になっています。色の濃淡は個体差があり、濃い紅色のものから、純白のものまでさまざまです。花びらは、花が終わった後もそのまま残ってタネを包むため、色は長く楽しむことができます。
- ☆ ミゾソバの仲間は、葉の形などの見た目の違いからいくつかの変種に分類されていましたが、近年、染色体数を調べた結果、分類が見直されています。もしかしたら市内のミゾソバも、調べるといくつかの種類が混じっているかもしれません。

市内の分布状況

市内全域の水辺でよく見られます。しばしば群生して、ピンクのお花畑になります。



牛の顔みたいな葉

ミゾソバの名前は、溝のような湿った場所に生えて、雑穀のソバにバツと見の姿が似ていることから来ています。一方で、葉の形から「ウシノヒタイ」という別名も存在します。葉先を下にしてみると、その形がまるで牛の正面顔に似ていることから来ているようです。ミゾソバの葉は、しばしば黒い斑紋が入りますが、これがちょうど牛の目に見えて、微笑ましい姿に癒されます。

花は茎の先で
こんぺいとうのように
かたまって咲く



花びらは先のほうが
ほんのりピンクになる



株元にも「開かない花」
がつく(閉鎖花)



葉はまるで
牛の正面顔の
ような形



アブラナ科 タネツケバナ属

ミチタネツケバナ (道種漬花)

Cardamine hirsuta L.

自生環境

道ばた、公園、野原 など

原産地

ヨーロッパ

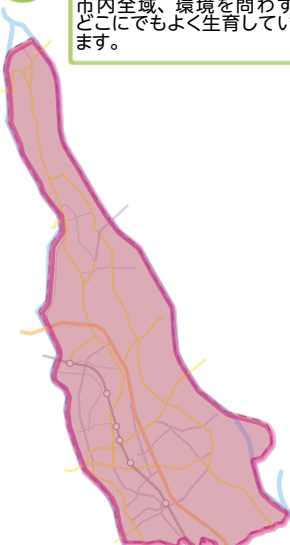
予想される被害



環境を問わず、どこにでも大量に繁茂しています。そのため、他の植物の生育場所を奪う原因になります。また、在来タネツケバナ類と交雑する可能性もあります。

市内の分布状況

市内全域、環境を問わずどこにでもよく生育しています。

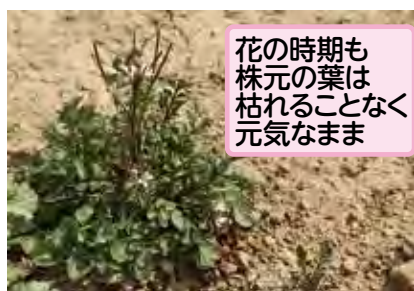


特徴

- ☆ ヨーロッパ原産の越年草ですが、世界中に広がっています。国内では、1990年代には既に日本海側を中心に定着しているのが確認されていましたが、現在は全国各地の乾燥した芝地などによく見られます。
- ☆ 早ければ2月頃から咲き始め、梅雨前にはタネを飛ばして枯れます。花が咲き進むとともに茎が伸びていきますが、茎につく葉は小さくて数も少なめです。また、株元の葉は果実期まで残ります。一番の特徴は、葉のつけ根に白い毛がまばらに生えることで、見分けに迷ったときはここを見れば確実です。
- ☆ 海外ではヘアリービータークレスと呼ばれ、開花前の葉を摘んで、スープやサラダ、サンドイッチなどの香辛野菜として利用されます。ピリッとした辛味と独特な苦味があります。

なぜか突然広がった

ミチタネツケバナがその存在に気づかれたのは、1990年代。当時は、日本海側の地域を中心に確認され、太平洋側では珍しいものでしたが、2000年代に状況は一変。理由はわかりませんが、瞬く間に全国に広がり、現在では、どこに行っても目につきます。乾燥した芝地を好みますが、環境適応力が強いようで、林内の薄暗い場所や水辺など多様な環境で見られます。



花の時期も株元の葉は枯れることなく元気なまま



茎にはあまり葉がつかない



花びらは白色で4枚
雄しべは通常4本



葉のつけ根にまばらに毛が生える



花の後は棒のような果実が上向きにしゅっしゅっとなかなか目立つ

オオバコ科 クワガタソウ属

ムシクサ (虫草)

Veronica peregrina L.

自生環境

道ばた、湿地、水辺 など

原産地

日本在来

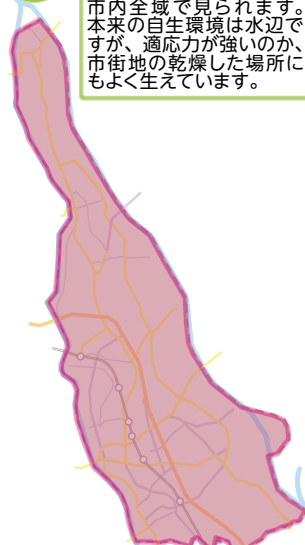
生育を脅かす要因

{今のところ特になし}

市内全域でよく見られ、今のところ絶滅の心配はありません。しかし、目の敵にしすぎるのは考えもの。地域に咲く野の花として、やさしく見守る気持ちを大切にしたいところです。

市内の分布状況

市内全域で見られます。本来の自生環境は水辺ですが、適応力が強いのか、市街地の乾燥した場所にもよく生えています。



特徴

- ☆ 湿った場所に多く生える 1～越年草です。ただ、環境に適応する力が強いのか、道ばたや荒地などの乾燥した場所にもたびたび出現します。通常は全体が無毛ですが、ケムシクサという毛が多く生える品種もまれに見られます。
- ☆ 直径 2～3mm のとても小さな白い花を、葉のわきに 1 個ずつ咲かせます。花期は春ですが、陽だまりでは冬のうちからちらほらと咲くこともあります。花後にできる果実は平べったいハート形ですが、しばしば虫こぶとなって丸く大きく膨らみます。
- ☆ 果実が成熟してくると、全体が赤く色づきます。初夏に周囲の草が青々と茂ってくる頃に紅葉するため、よく目立ちます。タネがこぼれ落ちると株の寿命はつき、梅雨の頃までには姿を消してしまいます。

虫を育てる草？

ムシクサには、丸く膨らんだ虫こぶ（ムシクサツボミタマフシと呼ばれます）ができやすく、これが本物の果実よりも目立ちます。ゾウムシの仲間がつぼみに産卵した結果、変形・肥大してできたもので、いわば「虫のゆりかご」です。中でふ化した幼虫は、こぶの組織を食べながら過ごし、成虫になると、穴を開けてそこから巣立っていきます。名前も、この様子からつけられました。



葉わきに
小さな
白い花を
咲かせる



通常は平べったい
ハート形の果実ができる



虫こぶは
ぷっくりと
膨らんで
よく目立つ



街中のコンクリートの
すき間に生えることも



茎や葉には毛はなく
厚みがあってみずみずしい



虫こぶの中で育った
ゾウムシの一種

シソ科 ムラサキシキブ属

ムラサキシキブ (紫式部)

Callicarpa japonica Thunb.

自生環境

山林

原産地

日本在来

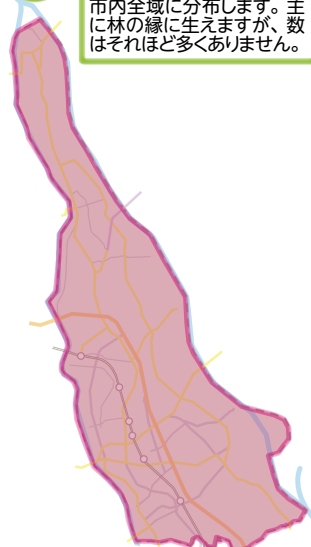
生育を脅かす要因



生育場所の雑木林の環境の多くは、残念ながらあまり良好な状態とは言えません。また、庭木用に栽培されるコムラサキとの間にできた、雑種と推定される株も見受けられます。

市内の分布状況

市内全域に分布します。主に林の縁に生えますが、数はそれほど多くありません。



特徴

- ☆ 高さ 3m ほどの落葉低木で、山林内に生えています。名前の由来ははっきりしませんが、紫色の果実が美しいことから、『源氏物語』の作者とされる平安時代の女性作家・紫式部に例えたとする説があります。
- ☆ 花の枝は葉のわきから出て、6～8月に小さな薄紫色の花を多数咲かせます。その後、小さな丸い果実ができ、やがて紫色に熟します。果実は密集せず、すぎ間が目立ちます。冬になると落葉しますが、果実は残ります。また、冬芽も翼を上にあげてバンザイした鳥のような形で特徴的なため、冬でも容易に見分けられます。
- ☆ ハムシ科の昆虫・イチモンジカメノコハムシは、ムラサキシキブの仲間の葉を食べます。このハムシを観察する場合は、ムラサキシキブの自生する場所を探すと良いです。

庭のムラサキシキブは別物

庭木用に「ムラサキシキブ」の名前で売られているものは、その多くが本種ではなくコムラサキ（コムラサキシキブ）という別の種類です。両者は同じ仲間なのでよく似ていますが、コムラサキのほうが果実は密集してつき、見応えがあります。また花や果実の枝のつく位置が、ムラサキシキブとは違って葉わきからではなく、少しずれます。また、冬芽や葉の形も異なります。

果実は紫色で
ややまばらにつく



果実の枝は
葉のすぐわき
から出る



花びらは
下半分が
つながって
筒のよう
になっている



梅雨の頃に
薄紫色の
花を咲かせる

1つの花の
雄しべは4本



冬芽は
むき出しに
近い状態で
冬を越す

まるで
粉のように
短くて
灰色っぽい
毛がびっしり
生えている

葉は全体的に
縁が細かく
ギザギザしている



イネ科 メヒシバ属

メヒシバ (雌日芝)

Digitaria ciliaris (Retz.) Koeler

自生環境

野原、道ばた、畑地 など

原産地

日本在来

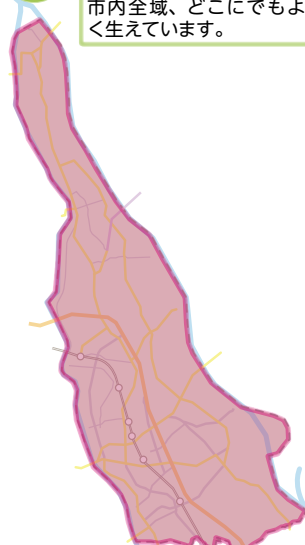
生育を脅かす要因



身近な場所によく見られ、今のところ絶滅の心配はありません。しかし、目の敵にしすぎるのは考えもの。地域に咲く野の花として、やさしく見守る気持ちを大切にしたいところです。

市内の分布状況

市内全域、どこにでもよく生えています。



特徴

- ☆ 道ばたや野原、畑地など、いたるところに生えています。オヒシバ (p44) と比べるとやや湿った草むらの環境を好みますが、乾燥や日照りにもよく耐えます。
- ☆ 葉は薄くてやわらかく、穂も細くて全体的に繊細な感じがします。ただ、繊細な姿とは裏腹に繁殖力はとても強く、わずかに残ったちぎれた枝からも容易に復活できる能力を持っています。そのため、雑草として嫌われる傾向がありますが、バッタの仲間など多くの草食昆虫の命を支えています。
- ☆ 小穂（穂を構成するツブツブの部分）や茎に生える毛の量は個体差があります。小穂の毛が目立つものは、クシゲメヒシバと呼ばれることもあります。

草むしりに負けない

メヒシバは茎がやわらかく、地面につくと、節から発根し、地に茎を固定します。これを何度も繰り返しながら伸び、まるで紙テープを画鋏（がびょう）で何か所か留めたような感じになります。画鋏を取らずに紙テープを引っ張るとちぎれてしまうように、メヒシバを引っ張っても、発根した根と茎の一部が地面に残り、そこから速やかに再生します。このようにして、草むしりから身を守っているのです。

全体的に細くて弱々しい感じ



しょうすい
小穂は細長くて両端がとがったレンズのような形



小穂に毛が目立つ株もある



茎の節から根が出る



葉は薄くてやわらかい



しょうすい
小穂・・・イネ科の花のあつまりの単位のこと。花の数はさまざま。

メマツヨイグサ (雌待宵草)

Oenothera biennis L.

自生環境

荒れ地、河川敷、道ばた など

原産地

北アメリカ

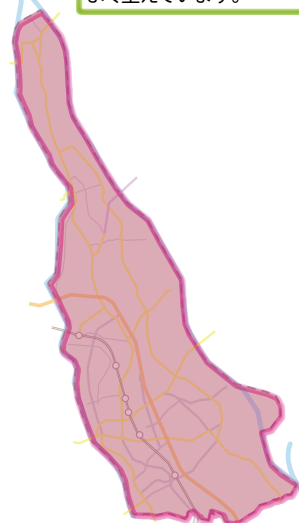
予想される被害



繁殖力が強いので、しばしば大群生して、背の高い草やぶをつくります。そのことにより、もともと生えていた植物の生息場所を奪ってしまう可能性があります。

市内の分布状況

市内全域、身近な場所によく生えています。



特徴

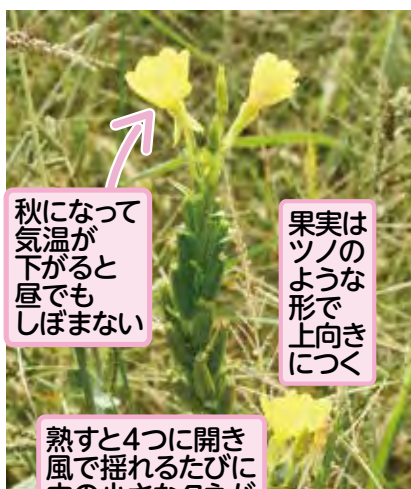
- ☆ 1920年代に観賞用に導入されましたが、増える力がとても強く、今や荒れ地で生い茂って、他の外来種とともに背の高いやぶをつくっています。それでも夏の夜に咲かせる花は、幽玄な美を感じます。花の直径は2～5 cmほどで、季節が進んで気温が下がってくると日中も開いたままになります。
- ☆ 果実は棒状で、熟すと先が4つに開き、この中に細かいタネがびっしりと詰まっています。この果実はいわば「天然のタネまき器」で、風などで揺れるたびに、中のタネがすき間から散布されていく仕組みとなっています。
- ☆ マツヨイグサの仲間でも最もよく見かけるのが、このメマツヨイグサとコマツヨイグサです。かつて多かったオオマツヨイグサは、今はまれになりました。オオマツヨイグサは、メマツヨイグサそっくりですが、メマツヨイグサよりも明らかに大きな花を咲かせます。

現地では根を保存食に

メマツヨイグサは、夜に咲く幽玄な花を楽しむために観賞用に栽培されるだけではなく、食べられる草としても役に立っています。新芽や花、つぼみはゆでて和え物にしたり、天ぷらにしたりと山菜として食べられます。また根がとても太くなるため、「ハムの根」とも呼ばれ、アメリカ先住民は乾燥させたものを、冬の保存食としたようです。乾燥させた根は、ゆでると甘くて美味しく食べられます。



夏の夜に黄色い花を咲かせる



秋になって気温が下がると昼でもしままない

果実はツノのような形で上向きにつく

熟すと4つに開き風で揺れるたびに中の小さなタネがまき散らされる



茎は立ち大人の背丈以上に育つことも多い



ロゼットで冬越する



ロゼットは厳しい寒さに当たると赤くなる

キク科 タカサブロウ属

モトタカサブロウ (元高三郎)

Eclipta thermalis Bunge

自生環境

水田、湿地 など

原産地

日本在来

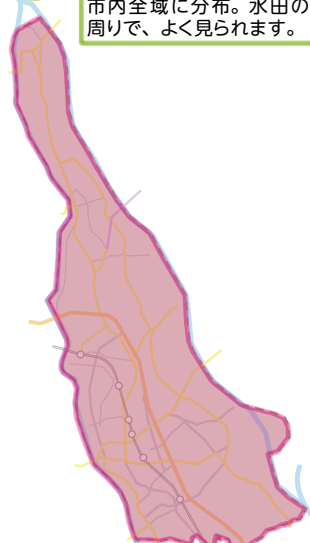
生育を脅かす要因



市内の水田では、比較的良好に見ることが出来ます。ただ、同じ仲間である外来種のアメリカタカサブロウや、他の外来植物が繁茂すると、生育場所を奪われてしまうおそれがあります。

市内の分布状況

市内全域に分布。水田の周りで、よく見られます。



特徴

☆ いわゆる「水田雑草」で、水田周辺によく生える1年草です。かつては、日本に自生するのはタカサブロウ1種類のみとされてきましたが、その後の研究で在来種と外来種（アメリカ原産）の2種類が混じっていることが判明しました。現在は、在来種をモトタカサブロウ、外来種をアメリカタカサブロウと呼んでいます。

☆ 草丈は環境によって大きく変動し、20～70cmほどになります。夏から秋にかけ、直径1cmほどの少しくすんだ白色の花を咲かせます。霜が降りる頃には、全体が黒っぽく変色して枯れます。

☆ アメリカタカサブロウとの最大の違いは、タネの形です。タネの左右に翼（よく）があり、ずんぐりした形になります（アメリカタカサブロウは翼がなくて細い）。また、アメリカタカサブロウと比べると、葉の幅が広く、色もやや黒ずむ傾向があります。

茎で字が書ける草

タカサブロウの茎や葉に含まれる汁は、空気に触れると青黒く変色します。そのため、茎を折って汁を紙にこすりつけるようにすると、時間とともに文字が浮かび上がってきます。昔、高三郎という人が茎で字を書いたことが名前の由来だとする説もありますが、真意は不明です。古い時代に皮膚病（タタラビ）を治すのに使ったためタタラビンノウと呼ばれ、それが訛（なま）ったとする異説もあります。



アメリカタカサブロウより
葉幅が広く全体的にずんぐり



舌状花

花の直径は
1cm くらい

筒状花

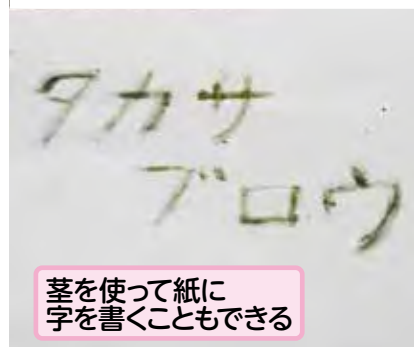
タネは
平たい皿
のように
集まって
できる

翼

タネの両側に翼があり
ずんぐりして見える



茎の汁は
空気に
触れると
黒く変色



茎を使って紙に
字を書くこともできる

アカネ科 ヤエムグラ属

ヤエムグラ (八重葎)

Galium spurium L. var. *echinospermon* (Wallr.) Hayek.

自生環境

道ばた、野原、河川敷 など

原産地

日本在来

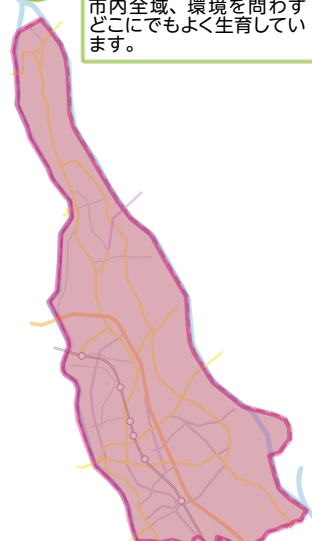
生育を脅かす要因

(今のところ特になし)

市内全域でよく見られ、今のところ絶滅の心配はありません。しかし、目の敵にしすぎるのは考えもの。地域に咲く野の花として、やさしく見守る気持ちを大切にしたいところです。

市内の分布状況

市内全域、環境を問わずどこにでもよく生育しています。



特徴

- ☆ 身近な場所によく生える 1～越年草です。茎はやわらかく、あちこちにもたれかかったり折り重なったりしながら、50～100cm 近くまで伸びていきます。茎や葉には下向きの小さな刺がたくさん生えていて、触るとザラザラしています。この刺は茎のずり落ち防止に役立っています。
- ☆ 4～6月頃に、直径1～2mmほどのとても小さな黄緑色の花を多数咲かせます。花びらは4枚あるように見えますが、合弁花なので根元で全部つながっていて、冠状になっています。このような花びらを花冠（かかん）と言います。
- ☆ 果実は直径2mmほどの球形で、通常2個1組となつてつきます。熟すと真っ黒になり、かぎ爪状の刺で服や動物の体によくくっつきます。

勲章を作ろう！

ヤエムグラは茎や葉に小さな刺が多く、服によくくっつきます。また、葉は細長く、6～8枚が1か所から放射状に広がるように見えます。ちなみに、本当の葉は2枚のみで、あとは托葉（たくよう）と呼ばれる部分が変形して葉のようになったものです。この部分をちぎり、服にぺたんとくっつけると、丸い勲章のできあがり。このことから、クンシヨウグサという別名もあります。



花は薄い黄緑色で4つに開く



2個ずつつく果実にはかぎ爪状の小さな刺がびっしりとある

茎や葉にも小さな刺がたくさん生えていて服などにくっつく



たくさんの茎が幾重にも折り重なってあちこちに覆いかぶさる

ウコギ科 ヤツデ属

ヤツデ(ハ手)

Fatsia japonica (Thunb.) Decne. et Planch.

自生環境

林内、林縁 など

原産地

日本在来

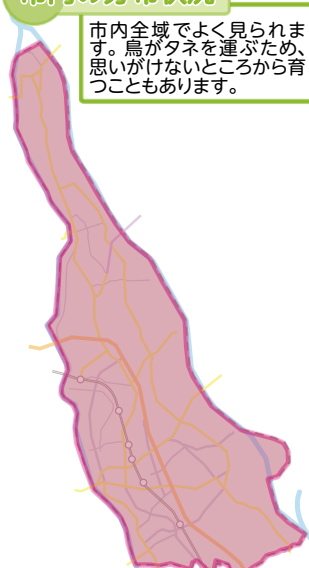
生育を脅かす要因

{今のところ特になし}

身近な場所に多く、今のところ絶滅の心配はありません。現在市内で見られる野生株が、栽培株の野生化によって広がったものなのか、もともと自生していたものなのかは不明です。

市内の分布状況

市内全域でよく見られます。鳥がタネを運ぶため、思いがけないところから育つこともあります。



特徴

- ☆ 本州（関東地方以西）、四国、九州、南西諸島の山林内に自生する常緑樹です。かつては庭木としても人気の樹種で、鳥がタネをよく運ぶため、あちこちで野生化しています。そのため、栽培からの野生化なのか、真の自生なのかの判断は極めて難しくなっています。
- ☆ 古くは葉を入浴剤に用いたと言いますが、毒成分があるので注意が必要です。かつてはその毒成分を使って魚を獲ったというほどです。ただ、食べない限り大丈夫です。
- ☆ 11～12月の枯れ草の目立つ時期な花を咲かせるため、ハナアブやチョウなどの昆虫にとっては貴重な蜜源になっています。花は白色で、1つ1つは小さいのですが、球になって集まって咲くため目立ちます。

天狗の葉団扇

ヤツデの葉は、ギザギザと裂けて、まるで手のひらのような形に見えます。裂ける数は同じ株の中でも葉ごとに多少異なりますが、8が多いことから、「ハ手」と名前がつけられました。ちなみに若い苗などでは、切れ込みの数が少なくなる傾向があります。この葉は直径40cmにもなる大きなもので、まるで天狗の持つ団扇を連想させることから、テングノハウチワという別名もあります。

小さな花が丸く集まって咲く

葉は手のひらのように切れ込む



果実の頃穂は下向きに垂れる



斑入りの品種も栽培される



タデ科 イヌタデ属

ヤナギタデ (柳蓼)

Persicaria hydropiper (L.) Delarbre

自生環境

水田、湿地 など

原産地

日本在来

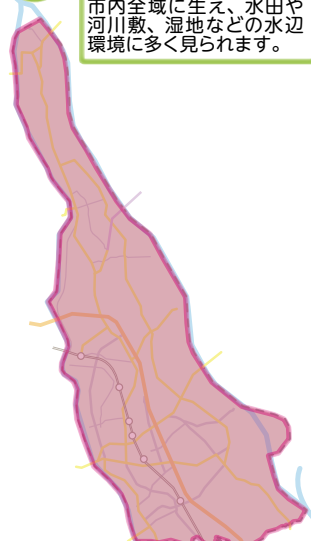
生育を脅かす要因



現時点では、水辺でよく見られ、数も多く絶滅の心配はありません。ただ、水田とその周りに多く生える傾向があるため、農薬の種類変更などによって影響が出る可能性があります。

市内の分布状況

市内全域に生え、水田や河川敷、湿地などの水辺環境に多く見られます。



特徴

- ☆ 水田や湿地、河川敷などの水辺環境によく生えるタデの仲間です。稲刈り後の水田周辺で、特に見つけやすい傾向があります。湧水のある場所では、水中で流れにたなびきながら、まるで水草のように育つこともあります。
- ☆ ことわざ「蓼（タデ）食う虫も好き好き」の蓼は、このヤナギタデのことです。ヤナギタデの葉はかじると強い辛みがあります。こんな辛い葉でも好んで食べる虫がいるのと同様に、人の好みはさまざまという意味合いがあります。
- ☆ 早いものでは7月頃から穂を出し始めますが、本格的な花期は秋になってからです。花は茎の先だけではなく、葉のつけ根にも、鞘の中に包まれるようにして何個かつきます。

刺身のつまにも

かじるとピリッとした辛みのあるヤナギタデは、昔から香辛野菜としても利用されてきました。そのことからホンタデ、マタデ（本物、真のタデ）という別名もあります。葉が赤紫色のムラサキタデ（紅たで）などの栽培品種もあります。若い苗はアユの塩焼きに添えたり、すりおろして酢と混ぜて「タデ酢」にします。また、タネから芽生えたばかりのものは芽タデと呼ばれ、刺身のつまに添えられます。



花の穂は垂れ下がる



花は白色で少し緑やピンクがかかる



托葉鞘の縁は短い毛がある

たくようしょう

托葉鞘の中にも花がつく



芽生えたばかりのふたばを刺身のつまにする

品種

ムラサキタデ

ブドウ科 ヤブカラシ属

ヤブカラシ (藪枯らし)

Cayratia japonica (Thunb.) Gagnep

自生環境

道ばた、野原、林縁 など

原産地

日本在来

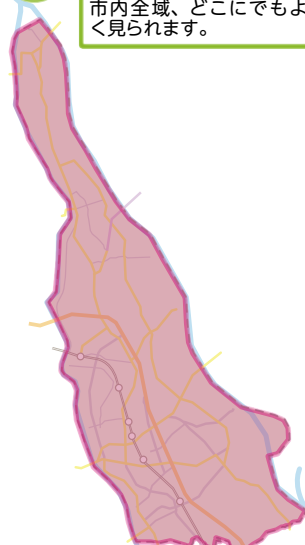
生育を脅かす要因

{今のところ特になし}

身近な場所によく見られ、今のところ絶滅の心配はありません。しかし、目の敵にしすぎるのは考えもの。地域に咲く野の花として、やさしく見守る気持ちを大切にしたいところです。

市内の分布状況

市内全域、どこにでもよく見られます。



特徴

- ☆ いたるところによく生えるつる草で、果実はできませんが、地下茎で旺盛に繁殖していきます。林縁や草やぶに覆いかぶさるようにして「草のマント」をつくります。
- ☆ 花には黄緑色の花弁が4～5枚ありますが、開花後すぐに脱落してしまい、花盤と呼ばれる中心付近のだいたい色の部分が目立ちます。この部分には蜜がたっぷりあるため、チョウやハチなどたくさんの昆虫が蜜を求めてやってきます。スズメバチもよくやってきますが、吸蜜中は派手に刺激しない限り襲ってくることはありません。
- ☆ つるの成長が早く、藪（やぶ）をも枯らす勢いで伸びるというのが名前の由来で、雑草として目の敵にされがちです。しかし、日本在来で、地域の生態系にとって欠かすことのできない大切な植物です。

果実はできるの？

野田市周辺で見かけるヤブカラシは、花はよく咲くものの、ほとんど結実しません。実はヤブカラシには、果実のできる系統とできない系統があります。果実のできる系統は西日本に多く、野田市周辺には自然分布はないと考えられます。ただ、工事などの人為的な影響で持ち込まれることがあるようで、まれに見ることもあります。ヤブカラシの果実は球形で黒っぽく、光沢があります。



葉は5枚1組のことが多い



花びらは短時間で散る



だいたい色の花盤は蜜がたっぷり



果実ができない株



果実ができる株

黒くて丸い果実ができる

ツバキ科 ツバキ属

ヤブツバキ (藪椿)

Camellia japonica L.

自生環境

林縁、神社 など

原産地

日本在来

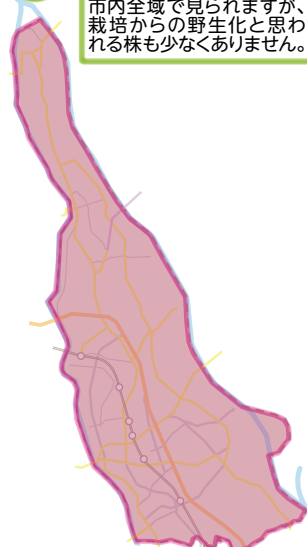
生育を脅かす要因



ヤブツバキの自生する山林環境は、開発などの影響を受けやすい傾向があります。また、ツバキの仲間とは多種多様な園芸品種が栽培されるため、交雑の心配もあります。

市内の分布状況

市内全域で見られますが、栽培からの野生化と思われる株も少なくありません。



特徴

- ☆ 山林に自生する常緑樹で、海沿いで特に多く見られる傾向があります。花がきれいなため、庭や公園、神社などにもよく植えられています。樹高は放っておけば5m前後になりますが、剪定などで樹高を低くすることもできます。
- ☆ 11月～翌4月に開花しますが、厳冬期は花数が少なくなります。花は鳥媒花で、メジロやヒヨドリなどが吸蜜に訪れます。果実は球形で、成熟すると3～5つに割れてタネを落とします。タネは硬い殻に包まれているが、中に良質の油が含まれており、椿油の原料となります。
- ☆ 葉は分厚く頑丈で、表面には強い光沢があります。潮風や大気汚染などに強い耐性があります。一方で、チャドクガ（ドクガ科）の幼虫の食糧でもあります。チャドクガはしばしば大発生して葉を食いつくし、丸坊主にしてしまうこともあります。

カンツバキの正体は？

ツバキの仲間は、花がきれいなため庭や公園に植えられ、園芸品種もたくさん作り出されています。その中でも比較的人気の高い品種で、市内でもよく見かけるのが「カンツバキ(寒椿)」です。これは、ヤブツバキとサザンカを交配して作られた園芸種です。花や葉はやや小ぶり、雄しべはヤブツバキのようにはっきりとした筒にはなりません。また、花後は、花びらがはらはらと散ります。

葉は分厚くて光沢がある

雄しべは根元がくっついて筒状になる

野生種の花は通常赤紫色

咲き終わった花はそのままの形でぽとぽと落ちる

果実は球形で直径は2～3cmほど

熟すと開いて中のタネを落とす

タネの中には油がたっぷり

花は白色

品種

シロバナヤブツバキ

園芸品種

キンギョツバキ

金魚のような形の葉

ヤマノイモ科 ヤマノイモ属

ヤマノイモ (山の芋)

Dioscorea japonica Thunb.

自生環境

林縁、道ばた など

原産地

日本在来

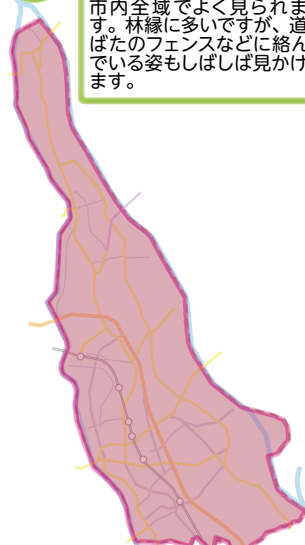
生育を脅かす要因

(今のところ特になし)

市内全域でよく見られ、今のところ絶滅の心配はありません。しかし、目の敵にしすぎるのは考えもの。地域に育つ植物として、やさしく見守る気持ちを大切にしたいところです。

市内の分布状況

市内全域でよく見られます。林縁に多いですが、道ばたのフェンスなどに絡んでいる姿もしばしば見かけます。



特徴

- ☆ 山の芋の名前がありますが、山林内に限らず、いたるところでよく見られる多年草です。市街地でも、道ばたのフェンスや植え込みにつるを絡ませている姿をよく見かけます。根は自然薯（じねんじょ）とも呼ばれ、食用になります。
- ☆ 雌雄別株で、雄株と雌株が別々に存在します。ただ、花や果実がない状態での判別は困難です。花期は夏で、雄株・雌株ともに白い小さな花がつきます。両者は花の形やつきかたが異なり、雄株の穂が上向きなのに対し、雌株の穂は下向きに垂れ下がるようにつきます。
- ☆ 夏から秋にかけて、葉のわきに直径 1cm ほどのむかごができ、これも食べられます。むかごは繁殖手段のひとつで、これが地に落ちると芽を出して、新しい株として成長を始めます。

芋は毎年新しくなる

ヤマノイモは多年草で、株の充実とともに地中にできる芋もだんだん大きくなります。しかし実は、1つの芋が何年もかけて少しずつ伸びていくのではなく、毎年春に新しい芋をつくって完全に入れ替わります。新しい芋は、古い芋が蓄えた養分を取り込み、新しく取り入れた養分も蓄えて、前の芋より大きく育ちます。ヤマノイモの芋の部分を担根体（たんこんたい）と呼ぶこともあります。



むかご・・・芽が変化してできたもの。地面に落ちると、芽を出して新しい株として育つ。

ユリ科 ユリ属

ヤマユリ (山百合)

Lilium auratum Lindl.

自生環境

林内、林縁

原産地

日本在来

生育を脅かす要因



山林内に自生するため、ササ等の繁茂による荒廃や、伐採・造成などが減少リスクとなります。また、園芸や食用目的で採集されやすく、それも減少に拍車をかけるおそれがあります。

市内の分布状況

中央の杜のヤマユリは、市民の財産として大切に守られています。それ以外の場所は保全の観点から非公表です。



中央の杜

ゆり根の正体

「ゆり根」は文字通りユリの根っこの意味、正確に言えば地中にできる鱗茎のことです。甘味と苦味を兼ね備え、もっちりとした食感があり、栄養価も高いため、古くから食用として利用されています。主に食用にされるのは、ヤマユリやオニユリ、コオニユリ、そしてそれらの改良品種です。スーパーなどで出回っているものは、コオニユリまたはその改良品種が多いようです。

特徴

- ☆ 日本を代表する野生ユリのひとつで、山林に自生しています。花は直径 20cm 以上にもなり、芳香が強く、花の最盛期には辺り一面むせ返るほどのユリの香りに包まれます。
- ☆ 地中に鱗茎（りんけい）をつくり、年を重ねるごとに鱗茎を構成する 1 つ 1 つの鱗片（りんぺん）が大きくなり、数も増えていきます。この鱗片はやがて分離して新しい株になります。この鱗茎は「ゆり根」と呼ばれ、良質のでんぷんを含むため古くから食用にされます。
- ☆ ヤマユリをはじめとする日本の野生ユリは、その美しさから世界的に人気があります。品種改良にも広く使われ、多彩な園芸品種を生み出すもとにもなっています。



茎の先に大きな花が
何輪も咲く



花びらの中央に
黄色い縦すじが入る

茶色いぶちぶち
模様がある

花粉はだいたい色で
べたべたして
服に着くと
なかなか取れない



果実は熟すと
3 つに裂けて
中からたくさんの
タネがこぼれる

アカバナ科 マツヨイグサ属

ユウゲシヨウ (タ化粧)

Oenothera rosea L'Hér. ex Aiton

自生環境

道ばた、荒地、畑地 など

原産地

南アメリカ

予想される被害



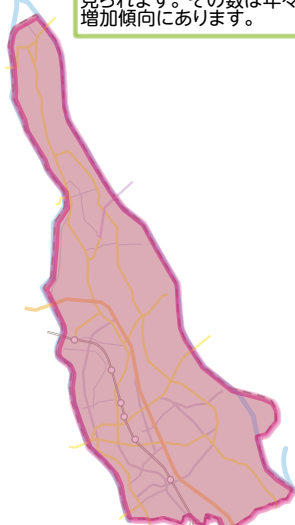
2000年代以降爆発的に増え、今ではどこにでも見られるようになりました。他の植物の生育場所を奪ったり、農地で繁茂して農業被害をもたらしたりするおそれがあります。

特徴

- ☆ 南アメリカ原産で、きれいな花を咲かせるため、世界中で栽培されている多年草です。国内には、明治期に園芸植物として導入されました。しばらくは、こぼれダネから野生化する程度でしたが、2000年代に入ってから突如爆発的な勢いで繁殖し、現在では道ばたでよく見られる存在となりました。
- ☆ 初夏から秋にかけて、桃色の花を次々と咲かせます。花の直径は 1cm ほどで、花びらは4枚です。ときに白い花を咲かせる株もあり、かつては非常に珍しいものでしたが、最近は少しずつ見かける機会が増えています。
- ☆ タ化粧の名前は、夕方になると化粧をしたようにいっせいに花を咲かせることから来ていると言います。しかし、実際には昼咲きで、朝に開花して夕方には閉じてしまうものが多いようです。

市内の分布状況

市内全域、どこにでもよく見られます。その数は年々増加傾向にあります。



果実は感雨計つき

ユウゲシヨウは、雨粒が当たってしぶきが跳ねるとき勢いを利用してタネをまき散らします。果実はマラカスのような形をしていて、その中に細かいタネが入っています。雨が降り始めて表面が濡れると、感雨計のごとくそれを検知して果皮が花のように開き、中のタネを雨にさらします。一方、雨があがって表面が乾燥してくると、果皮は再び閉じて次の雨をじっと待つのです。



花は昼間に咲くことが多い



花びらは4枚

花の後ろに2枚のがくがある



花の果実は濡れると開く



ロゼットで冬越しする

葉はギザギザと切れ込むことが多い



白い花を咲かせる株もある

ロゼット・・・植物が冬を越すため、地面にべったり張りつくように葉を広げる形のこと。太陽の光をたっぷり浴び、冷たい風を避けることができる。

ヤマゴボウ科 ヤマゴボウ属

ヨウシュヤマゴボウ (洋種山牛蒡)

Phytolacca americana L.

自生環境

道ばた、林縁、荒地地 など

原産地

北アメリカ

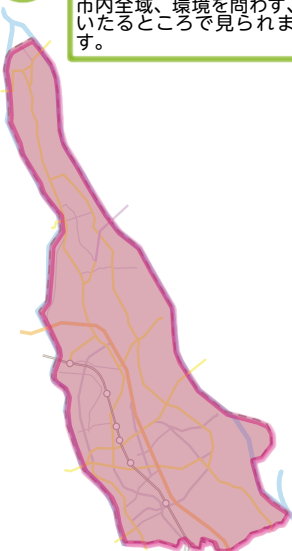
予想される被害



全体に強い毒がありますが、「山牛蒡」の名から、山菜を連想させるため、誤食事故が後を絶ちません。果実は色水遊びに使われますが、有毒なので、口にしないようにしてください。

市内の分布状況

市内全域、環境を問わず、いたるところで見られます。



特徴

- ☆ 北アメリカ原産で、草丈が 2m にも達するととても大きな多年草です。日本には明治時代に渡来し、現在は空き地などで生い茂っています。なおヨーロッパでは、庭のアクセントとして、園芸用に栽培されています。
- ☆ 茎は盛んに枝分かれをしながら、旺盛に生育し、夏から秋にかけて、次々と花の穂を出します。花の直径は5～6mmほどで、花びらはありませんが、5枚の丸いがくが開いて、まるで小さな梅の花のように見えます。
- ☆ 秋、まるでぶどうのような果実の穂ができます。見た目は美味しそうですが、有毒で食べられません。ただ、鳥は好むようで、タネは鳥によってあちこちに運ばれていきます。果実をつぶすと、赤紫色の汁が採れ、染料としても使われます。

山菜の「山ごぼう」は別物

山菜として、よく漬物などに使われる「山ごぼう」。これは、モリアザミというアザミの一種の根を掘り出したもので、このヨウシュヤマゴボウではありません。誤食による中毒事例が後を絶たないため、注意が必要です。ちなみに、海外ではポーワルートと呼ばれ、若い葉を食べることもあると言いますが、厳重な毒抜きが必要で、失敗すると中毒を起こすとのことで、やめたほうが良いでしょう。



花に花びらはなく
花びらのように
見えるのは5枚のがく



果実をつなぐ
軸や柄の部分は
鮮やかな
赤紫色に色づく

果実は
黒く熟すが
有毒で
食べられない



果実をつぶすと
赤紫色の色がつき
インクベリーとも
呼ばれる

ゴボウのように
太い根だが
強い毒があるので
絶対に食べては
いけない

イネ科 ヨシ属

ヨシ(葦)

Phragmites communis Trin.

自生環境

河川敷、湿地 など

原産地

日本在来

生育を脅かす要因

{今のところ特になし}

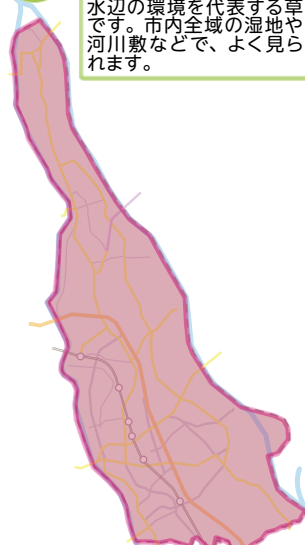
いたるところでよく見られ、今のところ絶滅の心配はありません。ただ、水辺は埋め立てなどの影響を受けやすいので、気づいたら激減していた、とならないようにしたいものです。

特徴

- ☆ 河川敷や池・沼の周りなど、水辺によく生えています。群生することが多く、ヨシ原と呼ばれる環境をつくりだしています。ヨシ原は、いろいろな生きものたちの生活の場として、重要な役割を担っています。
- ☆ 地下茎をどんどん伸ばして、旺盛に繁殖していきます。洪水や天地返しなどで土がかき混ぜられても、ちぎれた地下茎からすぐに再生できる能力を持っています。
- ☆ 夏の終わり頃から穂を出し始めます。この穂は晩秋に成熟し、綿毛つきのタネをたくさん飛ばします。冬になると地上の茎は枯れますが、これを利用して作ったすだれを葦簾（よしず）と言います。

市内の分布状況

水辺の環境を代表する草です。市内全域の湿地や河川敷などで、よく見られます。



悪しから良しに

「スルメ」を「アタリメ」と言うように、縁起の悪い言葉を連想させるものを、縁起の良いものに呼びかえることがあります。実は、ヨシもこの手の呼びかえが定着したものです。ヨシはもともとアシと呼ばれていました。その語源には「青し」「桿（ハシ）」など、いくつかの説があります。いずれにせよ音が「悪し」を連想させるため、それを嫌って対義語のヨシ（良し）が当てられました。

花期の穂
花が地味なので
なかなか
気づきにくい

タネは綿毛があり
風でふわふわ舞う

葉の縁でうっかり
手を切らないよう
気をつけよう



キク科 ヨモギ属

ヨモギ (蓬)

Artemisia indica Willd. var. *maximowiczii* (Nakai) H.Hara

自生環境

道ばた、野原 など

原産地

日本在来

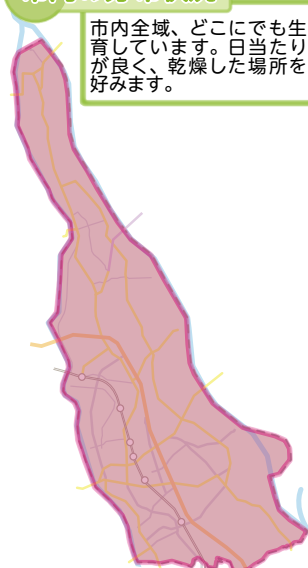
生育を脅かす要因

交雑

身近な場所によく見られ、とても丈夫な草です。ただ近年は、工事とともに海外由来（中国原産？）と思われるヨモギ類が急増していて、交雑などの影響が懸念されます。

市内の分布状況

市内全域、どこにでも生育しています。日当たりが良く、乾燥した場所を好みます。



有用だけど有害？

ヨモギの新芽は、やわらかくて香り高いため、草餅に入れたり、春の味覚として天ぷらなどにして食べられています。古くから薬草としても利用されており、現代でも乾燥させた葉は、健康茶や入浴剤に使われています。また、乾燥させた葉から取った綿毛はお灸に使われてきました。その一方で、風媒花なので、秋の花粉症の主要な原因植物としての側面も持っています。

特徴

- ☆ 身近な場所によく生える多年草で、しばしば辺り一面の群落を形成します。春に芽を出した後、茎は枝分かれしながら伸び、夏には 1m 前後の草丈になります。9～10 月頃、茎の上部に茶色い花をびっしりと咲かせます。
- ☆ 葉の形は個体差が大きく、また同じ株でもつく場所によってだいぶ変化します。葉柄と茎の接合部分には、仮托葉と呼ばれる小さな葉のようなものがあります。生育期の葉は表面は緑色ですが、裏面は白い綿毛に覆われています。全草に芳香があり、かつては邪気払いや魔よけの効果があると考えられていました。
- ☆ ヨモギの名前の由来は諸説あります。お灸に使うことから善燃草という説が多数派のようですが、真偽は不明です。

花は秋に咲く



春の新しい葉は
白い綿毛に包まれる



かりたきよう
仮托葉という
小さな葉のような
ものがある



小さな茶色い花が
何個か集まって
1つの花の
ようになっている



育ってくると
白い綿毛は
葉の裏側だけになる



ツリフネソウ科 ツリフネソウ属

ワタラセツリフネソウ (渡良瀬釣舟草)

Impatiens ohwadae M.Watan. et Seriz.

自生環境

平地の湿地

原産地

日本在来

生育を脅かす要因



市内でワタラセツリフネソウが自生している場所は限定的です。そのため外来種の侵入や埋め立て、除草剤散布など、ふとした出来事で消失してしまう可能性があります。

市内の分布状況

林と湿地が接しているような場所に見られます。ただ場所は限られており、何かの拍子に消滅してしまうおそれがあります。

自生環境保護のため 場所は非公開です



特徴

- ☆ 渡良瀬遊水地で発見され、2005年に新種として発表されました。周辺地域で「ツリフネソウ」とされていたもののなかにも、このワタラセツリフネソウが混じっていることが分かり、今のところ群馬・栃木・茨城・埼玉・千葉の5県での分布が確認されています。この分布の中には、野田市も含まれます。
- ☆ ツリフネソウとの最大の違いは、花の小花弁と呼ばれる部分です。ツリフネソウではこの部分がしゅっと長く伸びるのに対し、ワタラセツリフネソウでは先が黒ずみ、縮れたようになっています。また、ツリフネソウの花茎には赤茶色の毛がびっしり生えているのに対し、ワタラセツリフネソウは無毛です。
- ☆ 果実は軽く触れただけでパチンと音を立てて弾けます。果皮がまだ緑色でも、中のタネが熟していれば弾けます。

身近なツリフネソウの仲間

夏の花だんでよく見かけるインパチエンス。このインパチエンスというのは、ラテン語の *Impatiens* をカタカナ読みしたもので、ツリフネソウの仲間全体を指す呼び名です。そう、花だんのインパチエンスはツリフネソウの仲間なのです。また、理科の教科書によく出てくるホウセンカの学名は *Impatiens balsamina*。つまり、ホウセンカもツリフネソウの仲間なのです。



比較 ツリフネソウ

距 … 花の後ろ側にあり、細長く突き出した部分のこと。

外来種のはなし

もともと日本には分布しない動植物で、人の手によって海外から持ち込まれたものを外来種（外来生物）と言います。外来種が日本に入ってくるルートは、大きく2つあります。

1つは食用や観賞用など、利用目的がある場合です。もう1つは、海外から輸入された品物などに混入するなどして、意図せず持ち込まれてしまう場合です。

外来種が野生化して、野外に広がってしまうとさまざまな悪い影響が出てしまうおそれがあります。例えば、もともとその場所に暮らしていた動植物の生活場所を奪って、地域の生態系を壊してしまうかもしれません。すでに、身近な場所は外来種だらけになってしまっています。

そこで、環境省は影響が心配される外来種をまとめた「生態系被害防止外来種リスト」を作成しました。その中でも特に大きな影響があるものは「特定外来生物」に指定。特定外来生物に指定された種類は、環境省の許可なしで栽培・飼育、生きたままの移動などを行うことはできません。

外来種は一度野生化して広がってしまうと、地域の生態系を大きく変え、絶滅に追い込まれてしまう種類も出てくるかもしれません。そして、一度こうなると、元に戻すのはとても大変です。

一方で、産業に活用されている外来種も多く、私たちの暮らしを支える存在でもあります。

外来種自体が悪いのではなく、正しく付き合うことができていない私たち人間の側に問題があるのです。地域の生態系を守りながら、外来種とうまく付き合うためにはどうしたら良いか、皆さんも考えてみましょう。

図鑑のアイコンの意味

この図鑑では、外来種の場合、それが野生化して広がるような影響があるか、主なものをアイコンで記してあります。アイコンの種類と意味は以下のとおりです。

	増える力が強く、他の植物が育つ場所を奪ってしまう。		強い毒を持っていて、人や家畜に健康被害を与えてしまう。
	田畑で勢いよく増え、農作物に影響を与えてしまう。		鋭い刺があり、ケガをしてしまうおそれがある。
	水辺でよく増えるため、水の流れを悪くしてしまう。		日本の植物との間で雑種をつくり、遺伝子レベルで影響が出てしまう。
	空中に大量の花粉を飛ばし、花粉症の原因となる。		

生態系被害防止外来種リスト（主な植物）

定着予防外来種

今のところ国内では野生化していない。ただ、野生化すると影響がとても大きいので水際で食い止めたいもの。

総合対策外来種

国内ではすでに野生化していて対策が必要なもの。予想される影響の大きさから3つのグループに分けられる。

大

緊急対策外来種

オオキンケイギク、オオカワデジャ、アレチウリ、オオフサモなど

重点対策外来種

スイレン、オランダガラシ、コマツヨイグサ、トウネズミモチ、ツルニチニチソウ、オオブタクサ、セイタカアワダチソウ、外来タンポポ种群、ホテイアオイ、キショウブ など

その他の総合対策外来種

ミカヅキゼニゴケ、ヒメツルソバ、カラシナ、ピラカンサ、ナンキンハゼ、栽培キク、アメリカオニアザミ、ヒメジョオン、オオオナモミ、シンテッポウユリ、ハナニラ、セイバンモロコシ、シュロ類（九州北部以北）など

産業管理外来種

産業で利用されている外来種のうち、野生化すると大きな影響が出ると予想されるもの。

キウイフルーツ、ビワ、ハリエンジュ、モウソウチクなどの竹類 など

2021年3月 現在

※赤字は特定外来生物

絶滅危惧種のはなし

私たちの身の周りには、数えきれないほどたくさんの種類の動植物が暮らしています。しかし、人間の活動に伴って、動植物の生活場所がどんどん失われています。残されている場所でも、さまざまな理由から少しずつ環境が悪化し、動植物の種類や数はどんどん少なくなってきました。

中には、絶滅が心配されるレベルにまで数を減らしてしまったものも少なくありません。このような絶滅のおそれがある動植物を、危機のレベルに応じていくつかの「カテゴリー」に分け、リストとしてまとめたものがレッドリストです。そして、このレッドリストに選ばれた種類について詳しく解説した本をレッドデータブックと言います。

レッドリストには全国版と、都道府県版の2つがあります。全国版は日本全国を対象にしたもので、環境省が作成しているため、環境省レッドリストとも言います。

一方の都道府県版は、都道府県ごとに作成したもので、地域の実情を細かく反映しているため、より実態に近いものとなっています。野田市の場合、参考にするのは千葉県版レッドリストです。ただ、県境に位置しているため、隣接する埼玉県版、茨城県版のレッドリストも合わせて参考にとると良いでしょう。

レッドリストのカテゴリーは下表のとおりです。これらのうち、絶滅危惧IA類、絶滅危惧IB類、

絶滅危惧II類の3つをまとめて絶滅危惧種と言います。

動植物を取り巻く環境は日々変化しているため、レッドリストは定期的に見直しが行われています。

図鑑のアイコンの意味

この図鑑では、日本在来種の場合、数を減らす理由として考えられる主な要因をアイコンで表示しています。

	雑木林の手入れがされなくなり、ササだらけになって下草が育てない。
	増える力の強い外来種などとの場所をめぐる競争に負ける。
	都市化とともに草木が減り、空気や土が乾燥してしまう。
	草を枯らす薬(除草剤)などの影響で姿を消してしまう。
	生活排水や農業などにより水質が悪くなってしまう。
	人の手による開発によって生育場所がなくなってしまう。
	自然分布の境界に位置するため、もともと数が少ない。
	人や車による踏みつけが特に苦手で、大きなダメージを受けてしまう。
	もともと限られた場所にしか存在しない。
	花がきれいななどの理由から大量に採集されてしまう。
	外来種との間で雑種ができて、遺伝子レベルで影響が出てしまう。

レッドデータブック（レッドリスト）に使われているカテゴリー

絶滅	EX	日本からすでに絶滅したと考えられるもの。	絶滅	X	
野生絶滅	EW	生存は飼育・栽培されているもののみで、野生のものは絶滅したと考えられるもの。	野生絶滅	EW	
絶滅危惧種	IA類	CR	野生のものは、ごく近い将来に絶滅してしまう可能性がとて高いもの。	最重要保護	A
	IB類	EN	IA類ほどではないものの、野生のものは近い将来に絶滅してしまう可能性が高いもの。	重要保護	B
	II類	VU	絶滅する可能性が高くなってきているもの。	要保護	C
準絶滅危惧	NT	生きものを取りまく環境が悪くなっていて、今後の動向が心配されるもの。	一般保護	D	
情報不足	DD	どのランクに入れるべきか判断するだけの情報がないもの。	千葉県版 レッドリスト		
地域個体群	LP	特定の地域にだけ見られる生きものの集団で、今後絶滅する可能性があるもの。			

関宿城博物館周辺



関宿小学校周辺



関宿台町 田んぼ

だいまち



中戸谷津

なかとや



関宿ふれあい 広場周辺



岡田新田



おふなばし

小船橋水辺公園



はきだし沼



市内の観察スポット

市内には自然観察できる場所がたくさんあります。

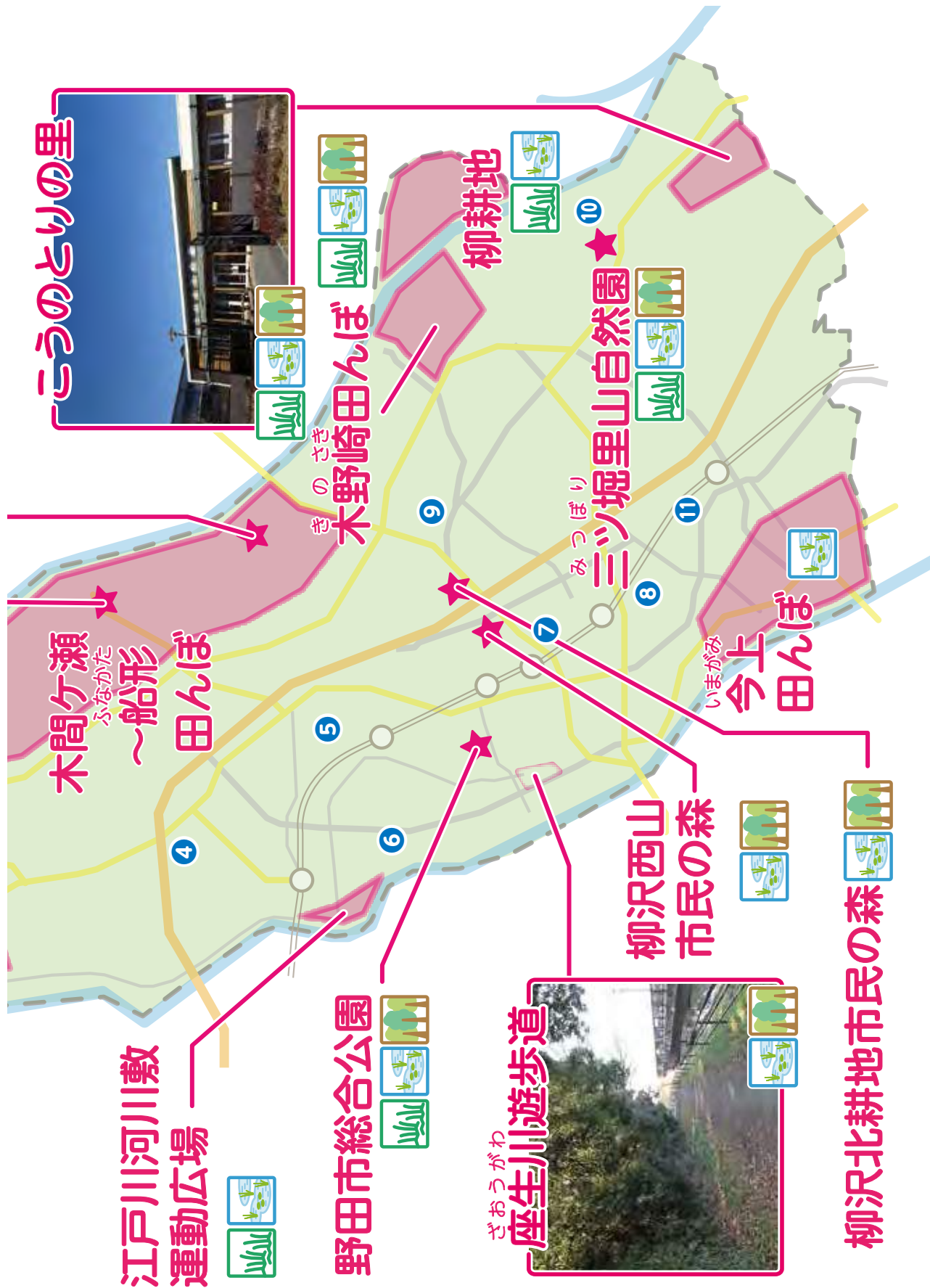
観察時は水際など危険な場所には行かないようにしましょう。

地図中のアイコンは、
環境を表しています。



- | | |
|-----------|---------|
| ① 関宿中学校 | ⑦ 第一中学校 |
| ② 二川中学校 | ⑧ 第二中学校 |
| ③ 木間ヶ瀬中学校 | ⑨ 東部中学校 |
| ④ 川間中学校 | ⑩ 福田中学校 |
| ⑤ 北部中学校 | ⑪ 南部中学校 |
| ⑥ 岩名中学校 | |





わぴちゃんねる

おすすめ動画10選

わぴちゃんねるは、わぴちゃんが野田市内のいろいろな場所を散策して、草花や昆虫たちとふれあい、面白おかしく紹介する YouTube チャンネルです。今回は、そんなわぴちゃんねるの中から、特におすすめの動画を紹介します！ぜひ観てくださいね！

美しい桜と菜の花と春の風景



関宿城博物館周辺の、春らしい桜と菜の花の風景に、思わず感動してしまいます。



いっぱい集まってヒマワリ



ヒマワリの真ん中の茶色い部分は、1つ1つがお花なんです。たくさんのお花が集まって1つのヒマワリに見えるんですよ。



見た目は怖いけど無毒な^{じょうろうぐも}女郎蜘蛛を見つけたので、その場で手の上に乗せてみた



見た目は怖いけど毒はない女郎蜘蛛を手の上に乗せちゃいます！毒はないとわかっているけど、手の上に乗せるのは勇気がいられますね！



あの昆虫の赤ちゃんを大発見



木をひっくり返すと、森のゴキブリやカブトムシの幼虫のサプライズ！好きな人にはたまらないですね！



木の中から意外な生き物が現れた



木の中でスズメバチが冬眠していました。動けないとわかっていても、近くに寄るのはちょっと怖い…。



神秘的な場所で縄跳び&カブトムシ・クワガタ採集&虹色に輝くミミズを手の上に乗せた！



神秘的な場所で縄跳びしたり、カブトムシやクワガタを捕まえたり、虹色に輝くミミズを手の上に乗せたりと、見どころたくさんです！



菜の花を引っこ抜いてみた結果



菜の花を引っこ抜いてみたら、イメージと違って大根みたいな根っこが現れてビックリ！



誰の名前？ ヤブカンゾウ



誰の名前？と思ってしまいますが、実はヤブカンゾウは植物の名前。天ぷらにして食べることができますよ。



夕日ヶ池の大賀ハス



記念すべき第一回目の動画！関宿総合公園の夕日ヶ池の大賀ハスを紹介。大きくてきれいな花を咲かせています。



開けてびっくり!?丸まったヨモギを開いてみたら衝撃的な中身だった



丸まったヨモギの葉っぱを開くと現れた衝撃的な中身に、一同驚愕してしまいました。



「みつけよう！野田の魅力あふれる植物図鑑」

著者	岩槻 秀明
編集	野田市自然経済推進部魅力推進課 わぴちゃんねる制作チーム
監修	千葉県立中央博物館 天野 誠
発行年月日	令和3年4月1日
著作権者	野田市
印刷	株式会社白樺写真工芸

季節の風景（裏表紙）



①春

春のひだまりでいっせいに
咲くホトケノザ **p115**

②夏

まるで茶色いソーセージの
ようなコガマの穂

③秋

夕日に照らされ金色に輝く
キンエノコロ

④冬

空気中の水蒸気がこおりつ
いたノイバラの枝 **p97**

	中学校	年	組
名前			

